

小箴言

サイド・ヌルスィー

リサーレ・イ・ヌール全集より
小箴言

書名：小箴言

著者：ベディーウッザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語からの翻訳：ナオキ・ヤマモト

発行所：レイハン出版

発行日：2026 年1月

印刷所：IMAK（イマク）〔イスタンブル〕



著作権 © レイハン出版 2026

I S B N : 978-83-63796-27-3

リサーレ・イ・ヌール全集より

小箴言

サイード・ヌルスィー



2026年1月

また知れ。新しい一日が始まるとは、お前にとっても他のすべての人にとっても、新しい世界の扉が開かれるということである。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
 وَ بِهِ نَسْتَعِينُ
 الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ وَ الصَّلَاةُ وَ السَّلَامُ عَلَى
 سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ وَ عَلَى آلِهِ وَ صَحْبِهِ أَجْمَعِينَ

我が兄弟よ、

そなたは我にいくつかの訓戒を求めた。

そなたが兵士であるゆえに、兵士の比喻をもって、八つの小話により幾つかの真理を、まず我が魂とともに聞くがよい。

我は自らの魂を、他の誰よりも訓戒を要するものと見なしている。かつて、八つの聖句（クルアーンの節）から学び取った八つの言葉を、やや長く己の魂に語り聞かせた。今ここでは、それらを簡略にし、庶民の言葉にて己の魂に語ろうと思う。誰であれ、望む者はともにこれを聞くがよい。

第一の言葉

「بِسْمِ اللَّهِ (ビスミッラー)」——この言葉は、あらゆる善きことの始まりである。

ゆえに、われらもまた、その御名をもって始める。

知れ、我が魂よ。

この尊き言葉は、イスラームの印であるのみならず、すべての存在がその沈黙の言葉において唱える常なる祈りである。

「بِسْمِ اللَّهِ」が、いかに尽きることなき力であり、いかに終わりなき祝福の源であるかを悟りたくば、この譬え話に耳を傾けよ。

アラビアの荒野を旅する者は、必ずある部族の長の名を受け、その保護に入らねばならぬ。さもなくば、賊の害から守られず、必要を満たすこともできず、無数の敵と果てなき欠乏の中で、孤立無援となるであろう。

このような旅に二人の男が出立した。その一人は謙遜であり、もう一人は傲慢であった。

謙遜な男は、ある族長の名を得た。傲慢な男は得なかった。

名を得た者は、道中どこでも安らかに進む。もしも野盗に出会えば、「我はこの族長の名において歩む者なり」と告げる。すると、賊は退き、手を出すことはない。

ある天幕に入れば、その名ゆえに敬われ、尊重される。

他方、傲慢な者は、旅の間じゅう、言い尽くせぬほどの災いに見舞われた。

常におののき、常に乞い求め、恥辱と屈辱の中に沈んだ。

されば、我が傲慢なる魂よ、

そなたこそが、その旅人である。

この世は、果てなき荒野である。そなたの無力と貧しさは限りなく、敵と欲求は尽きることがない。

さればこそ、この荒野の永遠の主にして、始原よりの支配者の御名を取るがよい。

そうすれば、そなたは全宇宙に乞い願うみじめさから、

あらゆる出来事の前に震える弱さから、救われるであろう。

まことに、この言葉は祝福された宝庫である。

そなたの果てなき無力と貧しさとを、限りなき力と慈悲に結びつける。

こうして、英智と慈悲に満ちた全能者の御前において、無力と貧しさは、もつとも受け入れられる仲介となる。

実に、「**بِسْمِ اللَّهِ**」とともに歩む者は、まるで軍に志願し、国家の名のもとに行動する兵士のごとし。彼は誰をも恐れず、「法の名において」「国家の名において」と告げて行い、あらゆることに立ち向かうことができる。

われらが冒頭に言ったように、すべての存在は、その状態の言葉によって「**بِسْمِ اللَّهِ**」と唱える。果たして、そうではないか？

次のように考えてみよ。

もし、ひとりの男がやって来て、町のすべての人々を力づくである場所に集め、また力づくで働かせているのを見たならば、おまえは確信をもってこう言うであろう—

その男は自分の名と力によって行動しているのではない、と。

むしろ彼は兵士であり、国家の名において行動し、君主の威力に依っているのだ、と。

それと同じように、あらゆる存在は、まことにアッラーの御名のもとに行動している。

見よ、微塵のように小さき種子や核が、その上に巨大な樹木を担ぎ、山のごとき重荷を支えている。

ゆえに、あらゆる木々は「بِسْمِ اللَّهِ (ビスマッラー)」と唱えているのである。

彼らは慈悲の宝庫から果実を両の手に満たし、我らに供する給仕となっている。

また、すべての園は「ビスマッラー」と唱える。

それは全能の御力の厨房から生まれた大釜のごとく、

数え切れぬほど多様で美味なる料理が、その中でともに煮込まれている。

さらに、牛やラクダ、羊、山羊といった尊き家畜たちは、みな「ビスマッラー」と唱える。

彼らは慈悲のあふれる恵みから湧き出る乳の泉となり、

糧を与える御方の御名において、もつとも繊細にして清らかなる、まるで命の水のような食を我らに差し出している。

また、すべての草木や樹木の根や茎もまた、「ビスミッター」と唱える。

絹のように柔らかいその根は、堅き石や土を貫いて進む。

アッラーの御名において、慈悲あまねく御方の御名において行動するゆえに、すべては彼らに従属する。

見よ、大気の中に枝が広がり実を結ぶように、

地中の堅い石や土の中でも、根が驚くほど容易に伸びて実をつける。

また、灼熱の暑さのもとにあっても、繊細な緑の葉が月のあいだ青々と瑞々しく保たれる。

これは、いわゆる「自然主義者」どもの口に強く平手を食らわせるものであり、

盲いた彼らの目に指を突き立てるように告げる。

「おまえたちが最も信頼していた硬さや熱ささえも、命令のもとに動いているのだ」と。

かくして、絹のように柔らかな根脈は、まるでムーサーの杖のごとくに、

فَقُلْنَا اضْرِبْ بِعَصَاكَ الْحَجَرَ

との命令に従って、岩を裂く。

そして、紙のように薄くか弱き葉は、まるでイブラーヒームの肢のように、燃えさかる熱に向かって、

يَا نَارُ كُونِي بَرْدًا وَسَلَامًا

の御言葉を読むのである。

ゆえに、あらゆるものは意味のうえで「ビスミッラー」と唱え、

アッラーの御名において、アッラーの恵みを我らに運び届けている。

ならば、われらもまた「ビスミッラー」と唱えるべきである。

アッラーの御名において与え、アッラーの御名において受け取るべきである。

ゆえに、アッラーの御名において与えぬ不注意な人間からは、受け取るべきではない。

一問い。

供え物を運ぶ者たる人々に、われらは代価を支払っている。

では、真の持ち主であるアッラーは、何を代価として求めておられるのか？

答

しかり、真の施し主であるアッラーが、我らに対して、これほど貴重な恩恵や財の代価としてお求めになるものは三つのみである。

ひとつは 記憶、

ひとつは 感謝、

ひとつは 思索 である。

始めに唱える「بِسْمِ اللَّهِ (ビスミッラー)」は記憶であり、

終わりに唱える「الْحَمْدُ لِلَّهِ (アルハムドゥリッラー)」は感謝である。

そのあいだにおいて、これらの貴く驚くべき芸術の傑作たる恩恵を観想し、

それらが唯一にして永遠の御方の力の奇跡、
慈悲の贈り物であることを思い悟ること—

それこそが思索である。

思え。

もし王の貴重な贈り物を、おとしめられ
た者が届けに来たとして、

そなたがその贈り物を携えた使者の足を
拝しながら、

真の贈与者たる王を知らずにいるならば、
それはいかに愚かなことか。

同じように、外面的な施し主を褒め称え、
愛しながら、真の施し主たるアッラーを忘
れることは、それよりもさらに千倍もの愚
かさである。

我が魂よ、もしそなたがこのような愚か
者でありたくないならば、

アッラーの御名において与えよ、

アッラーの御名において受け取れ、

アッラーの御名において始め、

アッラーの御名において行え。

平安あれ。

第二の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِالْغَيْبِ

もし、信仰のうちにいかに大なる幸福と恩恵があり、またいかに深き喜びと安らぎがあるかを知りたくば、次の譬え話を聞くがよい。

あるとき、二人の男が楽しみと商いのために旅に出た。

一人は自己中心的にして不運な方へと向かい、もう一人は神を見つめる者にして幸福な方へと歩みを進めた。

自己中心の男は、自己の欲のみに仕え、利己的で、心は暗く、世を悪しきものとして見るゆえ、悲観の報いとして、彼の眼には実に恐るべき国土が広がった。

見るところ、至る所に無力で哀れな人々がおり、暴虐な者どもの手に苦しめられ、破壊の中で叫びを上げている。

歩みゆく地のすべてが、悲惨と苦痛に満ちていた。全世界がまるで巨大な葬儀場のように見えた。

この悲しみと暗黒の状態を感じぬようにするには、酔うほかに道がなかった。

なぜなら、彼の目にはすべての人が敵に見え、他人に見えたからである。

そこかしこで、恐ろしい死者の列と、絶望の涙を流す孤児たちがいた。

彼の良心は絶え間なき苦悩の中にあつた。

他方、神を見つめる男は、神を崇め、真理を思う善良なる性質の持ち主であつた。

その眼には、まことに美しき国が広がった。

この善き男が入った国には、至るところに歓喜の祭があり、あらゆる場所で人々は喜び、祝宴を開き、熱狂と感謝の中に記憶の集いを行っていた。すべての人々は彼に親しみを覚え、友や親族のように見えた。国全体が「感謝と祝福のもとでの大いなる除隊祝祭」に包まれていた。

また、彼の耳には「アッラーは偉大なり」「アッラーのほかに神なし」と唱えながら、喜びに満ちて兵の徴集を告げる太鼓と音楽の響きが届いた。先の不幸な男が、自分も人々もすべての悲しみに苦しむのとは対照的に、この幸福な男は、自分も人々もすべ

ての喜びによって満たされ、心は安らかであった。そして彼は良き商いを得て、アッラーに感謝を捧げた。

やがて帰路についたとき、彼は先の男に出会い、その境遇を知った。

そして言った。

「おい、そなたは正気を失っているぞ。おそらく、そなたの心の中の醜さが外に映し出され、笑いを嘆きと見なし、除隊の祝いを略奪と思い違えているのだ。理性を取り戻し、心を清めよ。さすれば、この災厄の幕はそなたの目から取り払われ、真実を見ることができよう。」

なぜなら、かの国の王は、極めて公正にして、慈悲深く、民を思いやる御方であり、力強く秩序を愛し、あたたかく民を導く御方である。

また、その国土が目の前にこれほどまでに進歩と完成のしるしを示している以上、そなたの妄想が描き出すような姿であるはずがないではないか。

これを聞いた不幸な男は、ようやく正気に返り、悔悟して言った。

「まことに、わたしは酔いに溺れて狂っていたのだ。アッラーがおまえに満足されんことを。 おまえは、地獄のような状態からわたしを救ってくれた。」

我が魂よ、知れ。

最初の男とは、不信仰者であるか、あるいは罪深く忘却に沈む放縦の者である。

彼の眼に映るこの世界は、全体が大いなる喪の館である。

すべての生あるものは、別離と滅びの鞭によって泣く孤児である。

獣も人間も、死の爪に引き裂かれる、頼る者なき漂泊者である。

山や海のような巨大な存在も、魂なき恐るべき屍のごとく映る。

このような悲痛にして圧迫的な妄想が、彼の不信と迷妄から生じ、彼を内面的に責め苦しめるのだ。

これに対し、もう一人の男は信仰者である。彼は万物の創造主を知り、信じ、承認する。

彼の眼には、この世界は慈悲あまねく御方の記憶の館であり、人と獣のための学び

舎であり、人間と精霊が試される試練の広場して映る。

動物も人間も、その死は滅びではなく、ただの除隊である。生命の任務を終えた者たちは、この滅びゆく家を去り、心安らかに、歓喜をもって、波風のない別の世界へと赴くのである。

こうして、新たな任務を負う者たちのために場所が開かれ、彼らが来て働くことができるのである。

すべての動物と人間の誕生は、徴兵のようなものであり、武器を取って任務の持ち場につくことである。

すべての生あるものは、喜びに満ちた任務を帯びた兵士であり、誠実に満足して勤める公務の役人である。

響き渡るあらゆる声は、職務の始まりにおける記憶と讃美、または勤務を終えるときに感謝と歓喜、あるいは働く悦びより生じる旋律である。

すべての存在は、信仰者の眼には、気高き主（にして慈悲深き所有者の親しき奉仕

者であり、友なる役人であり、愛らしき書物のように映る。

このようにして、無数の繊細にして崇高、甘美にして喜ばしき真理が、信仰によって顕れ、輝きを放つのである。

ゆえに、信仰とは、天国のトゥーバの木の種子を宿す霊的な実であり、不信仰は、地獄のザクームの樹の種を秘めるものである。

したがって、真の安らぎと安全は、ただイスラームと信仰のうちにのみある。

ゆえに、われらは常にこう唱えるべきである。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ عَلٰى دِيْنِ الْاِسْلَامِ وَ كَمَالِ الْاِيْمَانِ



第三の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
يَا أَيُّهَا النَّاسُ اعْبُدُوا

礼拝は、いかに偉大なる商いであり幸福であるか。

放縦と快樂に耽ることは、いかに大いなる損失と破滅であるか。それを理解したくば、次の譬え話を聞け。

あるとき、二人の兵士が、遠方の都市へ行く命令を受けた。二人は共に進み、やがて道が二つに分かれるところに至った。そこに一人の男が立っていて、彼らにこう告げた。

「右の道は、何の害もなく、そこを行く十人のうち九人が大きな利益と安らぎを得る。左の道は、何の益もなく、そこを行く十人のうち九人が損失を被る。しかも、二つの道は長さも時間も同じである。ただ一つの違いは統制も支配もない左の道を行く者は、背囊も武器も持たずに行けることだ。外見上は軽やかで、偽りの安樂があるように見える。一方、軍律に従う右の道の兵士

は、滋養ある携帯食で満たされた四オツカの背囊と、あらゆる敵を制圧できる二キッ
イエの立派な官給の武器を携帯せねばなら
ない。」

二人の兵士は、この案内人の言葉を聞いたのち、幸福な兵士は右の道へと進んだ。

彼は肩と腰に一バトマン（約十数キロ）の重荷を負ったが、心と魂は、無数の屈辱と恐怖から解放された。

他方、不幸な兵士は軍務を放棄し、規律に従うことを嫌って左の道へと向かった。

その身体は一バトマンの重さから解放されたが、心は無数の屈辱の重圧の下に、魂は限りなき恐怖の中で押しつぶされた。

彼は誰に対しても乞い求めるように歩き、あらゆるもの、あらゆる出来事に怯えながら進んだ。ついに目的の地に到着すると、彼は反逆者・逃亡兵として処罰された。

一方、軍の規律を愛し、背囊と武器を守り、右の道を進んだ兵士は、誰にも屈することなく、誰も恐れず、心と良心の平安をもって歩み続けた。ついに望まれた都市に到達し、そこでは任務を立派に果たした名誉ある兵士にふさわしい報奨を受けた。

我が反抗的な魂よ、知れ。この二人の旅人とは、一方はアッラーの法に従う者、もう一方は反逆し、欲望に従う人間である。その道とは「人生の道」であり、魂の世界から始まり、

墓を経て、来世へと続くのである。

その「背囊と武器」とは、すなわち礼拝と敬虔である。礼拝には外見上の重さがあるように見えるが、その内に宿る安らぎと軽やかさは言葉に尽くせぬほどである。なぜなら礼拝者は礼拝の中でこう宣言する。

أَشْهَدُ أَنْ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ

「アッラーのほかに創造主も供給者もなし。害と益とはその御手の内にあり。かれは英智に満ち、無益なことをなさず、また慈悲深く、その恵みは限りない」と信じるゆえ、彼は万物のうちに慈悲の宝庫への扉を見いだし、祈りによってその扉を叩く。

また万物を自らの主の命に服するものとして見るがゆえに、主に避難し、信頼をもってすべての災いに対して守られる。信仰は彼に完全なる安心を与える。まことにあらゆる真の善行と同じく、勇気の源もまた

信仰と礼拝にあり、あらゆる悪行と同じく、臆病の源は迷妄にある。心が真に照らされた礼拝者は、大地が爆弾となって爆ぜようとも恐れはしない。むしろ「唯一にして永遠なる御方」の力の驚異を、甘美な驚嘆とともに眺めるであろう。だが、世にいう「理性啓蒙の人」にして心なき罪深き哲学者は、天に彗星を見るだけで地におののき、「あの暴れ星が地球に衝突するのではないか」と恐怖に陥る。（かつてこのような星にアメリカが震え、夜中に多くの人が家を捨てて逃げ出したという。）

実に人間は、限りなきものを必要としながら、その手持ちは無に等しい。また限りなき災厄にさらされながら、その力は無に等しい。まるでその所有と能力の範囲は、手の届くところまでしかない。しかし願望・欲望・苦悩・災いの範囲は、目や想念の及ぶかぎりまで広がっている。このように無力にして弱く、貧しく必要に満ちた人間の魂にとって、礼拝・信頼・唯一信仰・委任は、いかに偉大なる利益、幸福、恩恵であるか——完全に盲目でない者には明らかである。

よく知られているように、危険のない道は、たとえ十のうち一の確率であっても危険な道より選ばれるべきである。しかるに我らの問題たる礼拝の道は、危険なき上に十のうち九の確率で永遠の幸福の宝を約束している。他方、放縦と享樂の道は——罪人自身が認めるように——何の益もなく、十のうち九の確率で永遠の破滅と地獄の不幸をもたらすことは、無数の体験者と識者の一致した証言によって確かに立証されているのである。

そして、靈的体験と直観の人々の報告によっても、これらは確実に証明されている。要するに一來世における幸福のみならず、この現世の幸福さえも、礼拝とアッラーの軍に属することのうちにある。ゆえに、われらは常にこう唱えるべきである。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ عَلَى الطَّاعَةِ وَالتَّوْفِيقِ — 「従順と導きを賜わりしアッラーに讃えあれ」。そして、ムスリムとして創られたことに感謝すべきである。



第四の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
الصَّلَاةُ عِمَادُ الدِّينِ

礼拝がいかに尊く重大であり、またいかに少ない労力と犠牲で得られるものか、さらに礼拝を欠く者がいかに愚かで損な者であるかを、「二掛ける二が四である」ほど確実に理解したくば、次の譬え話を見よ。ある時、偉大な王が二人の召使を呼び、一人ひとりに二十四枚の金貨を与えて言った。「この金で旅費と切符代を賄いなさい。そして、わが所有する美しく豊かな農園に住むために必要なものを買そろえなさい。そこはここから二か月の距離にある。途中、一日の道のりに一つの駅がある。そこには馬車も船も鉄道も飛行機もある。手持ちの資金に応じて、どれにでも乗って行ける。」二人の召使は命令を受け、旅立った。

そのうちの一人は幸運で、駅までにいくらかの金を使ったが、その支出の中で主人を喜ばせる素晴らしい商いを得て、資本を一気に千倍に増やした。もう一人の召使は不運で放蕩者であり、駅に着くまでに二十

三枚の金貨を浪費し、賭博などに使って失い、一枚だけを残した。すると仲間が彼に言った。「おい、その一枚を切符に使い。そうすればこの長い旅を歩いて飢えながら行かずに済む。わたしたちの主人は寛大なお方だ。きっと哀れんで、そなたの過ちを赦してくださるだろう。そして飛行機に乗せてくださり、一日で私たちの居所に着ける。さもなくば二か月もの荒野を、空腹のまま徒歩で、孤独に歩まねばならぬぞ。」さて、この男が意地を張り、その最後の一枚を宝の鍵のような切符に換えず、一時の快樂のために放蕩に使ったとしたら—それほどの愚かさ、損失、不幸を、最も愚鈍な者でさえ理解しないでいられようか。されば、礼拝を怠る者よ、また礼拝を好まぬ我が魂よ、知れ。あの主人とは、我らの主にして創造主である。二人の召使にして旅人とは、その一人は信心深く、喜びをもって礼拝を行う者、もう一人は無関心で礼拝を怠る人間である。

その二十四枚の金貨とは、一日の二十四時間の寿命である。その豊かな農園とは天国であり、その駅とは墓である。そしてそ

の旅とは、人間が墓から復活を経て永遠へと向かう旅路にほかならぬ。人々は行いと敬虔の力に应じて、この長き道のりをさまざまな速度で進む。ある敬虔な者たちは、電光のように千年の距離を一日にして越え、ある者は想念のように五万年の道を一日にして過ぎる。偉大なるクルアーンは、この真理を二つの節によって示している。そして切符とは、礼拝である。一時間あれば、五回の礼拝のための洗浄も含めて十分である。さて、一日の二十三時間をこの儚い世の生活に費やしながら、永遠の生命に向けて一時間すら費やさぬ者が、どれほど損をし、どれほど己に不正を働き、どれほど理性に反していることか。千人のうち一人しか当たらぬ宝くじに財の半分を賭けることを理性が許すとすれば、それより確実に、二十四のうち一をもって九十九分の九十九の確率で永遠の宝を得る投資を拒む者は、いかに理性と叡智から遠ざかっていることか。しかも礼拝のうちには、魂と心と理性に大いなる安らぎがあり、肉体にとってもさほど重き労ではない。さらに礼拝を行う者は、他の許された世の行為も、善き意図

によって礼拝の価値を帯びる。このようにして、彼は生の全資本を来世のための財とし、儚き寿命をある意味で永続させるのである。



第五の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
إِنَّ اللَّهَ مَعَ الَّذِينَ اتَّقَوْا وَالَّذِينَ هُمْ مُحْسِنُونَ

礼拝を守り、大罪を避けることが、いかに真の人間の使命にして、創造目的に最もふさわしき帰結であるかを悟りたくば、次の譬えを聞くがよい。

戦時下のある部隊に、二人の兵があつた。一人は訓練を受けた職務に忠実な兵にして、他の一人は未熟にして我欲に従う兵であつた。職務に忠実な兵は、訓練と戦いに励み、糧食や給料のことを一切案じなかった。彼はよく知っていた―自らを養い、装備を与え、病めば治療し、必要あれば一口の食をその口にまで運ぶことは、国家の責務であると。彼の本来の務めはただ訓練と戦闘であつた。ときに食事の準備や器具の洗淨などの雑務に携わることもあつたが、問われれば言う、「国家の雑務を担っている」と。決して「生活のために働いている」とは言わなかった。

一方、腹を満たすことしか念頭にない未熟な兵は、訓練にも戦にも無関心であつた。

「それは国家の仕事だ、私のことではない」と言い、常に食の心配ばかりをして、部隊を離れ市場をうろつき、売買に明け暮れた。ある日、教練に励む仲間が彼に言った、
「兄弟よ、汝の真の務めは訓練と戦いである。汝はそのためにここに召されたのだ。王を信頼せよ。王は汝を飢えさせはしない。それは王の責務である。汝は無力にして貧しく、どこにあっても自らを養うことはできぬ。しかも今は戦時であり、動員の時である。もしこのまま命令に背けば、反逆者として罰せられるであろう。われらの前には二つの務めがある。その一つは王の務めにして、われらは時にその手助けをすることがある。王の務めとは、われらを養うことである。他の一つはわれら自身の務めであり、それは訓練と戦いである。王はこの務めに便宜を与えて助けてくださる。」

かくのごとく放蕩の兵が、この忠告に耳を貸さねば、いかに危うき境地に陥るか、理解するに難くあるまい。

かくのごとく、怠惰なる我が魂よ、聞け。あの波立つ戦場とは、この騒がしく混乱に満ちた現世の生である。部隊に分けられた

その大軍とは、人類社会そのものであり、その一つの部隊こそ、この時代におけるイスラーム共同体である。二人の兵士とは、ひとりは宗教上の義務を知り行い、大罪を避け、罪を犯さぬために己の欲とシャイターンと闘う敬虔なるムスリムである。もう一人は、真の養い主をまるで疑うかのように生計の悩みに沈み、義務を怠り、糧を得んがために出会う罪を平然と犯す罪人であり、損をする者である。訓練と教練とは（その筆頭が礼拝である）礼拝そのものであり、戦いとは、己の欲と気まま、そして人間とジンのシャイターンどもに対して闘い、罪惡と卑しき性格から心と魂を救い、永遠の滅びから護ることである。二つの務めのうち、一つは生命を与え養うことであり、他の一つは、生命を与え養う御方を崇め、祈り、信賴して安らぐことである。まことに、生命とは唯一にして永遠なる御方の芸術の最も輝かしき奇跡であり、主の叡智の驚異である。ゆえにその生命を授け造りし御方こそ、その生命を糧によって養い維持し給う御方である。それ以外にはありえぬ。証拠を求めるなら見よ―最も弱く愚

かなる生きもののほど、最も良く養われる（たとえば果実の中の虫や魚のように）。最も無力にして繊細なる被造物ほど、最も優れた糧を口にする（幼子や仔獣のように）。

まことに、正しき糧を得る手立てが力や才覚によるものではなく、むしろ無力と弱さによって与えられることを悟るには、魚と狐、幼子と猛獣、樹木と動物を比べるだけで十分である。ゆえに、生計の憂いのために礼拝を怠る者は、まさに訓練と塹壕を捨てて市場をさまよい物乞いする兵士のようなものである。だが、礼拝を果たした後、尊貴にして寛大なる供給者の慈悲の厨房から糧を求め、他人の負担とならぬよう自ら勤めることは、美德であり男らしさであり、それもまた一つの礼拝である。しかも、人間が礼拝のために創られたことは、その本性と内に備わる霊的な器官が明らかに示している。なぜなら、この世の生活に必要な働きや能力の面では、人間は最も卑小な雀一羽にも及ばぬ。しかし、霊的かつ来世的生命に必要な知識と謙虚さ、祈りと礼拝の面においては、生きとし生けるもの

の王にして司令官の地位にある。ゆえに、我が魂よ—もしそなたがこの世の命を究極の目的とし、そのみに励むなら、最も卑しい雀の一兵卒にすぎぬであろう。だが、もし来世の生命を究極の目的とし、この現世をそのための手段と畑と見なし、それに応じて働くならば、そなたは生き物の大いなる将軍となり、この世において尊貴なるアッラーの愛される僕となり、栄誉と敬意をもって遇される客となる。かくして、そなたの前には二つの道がある。望む方を選ぶがよい。そして導きと成功とを、最も慈悲深き御方に祈り求めよ。



第六の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
إِنَّ اللَّهَ اشْتَرَى مِنَ الْمُؤْمِنِينَ أَنْفُسَهُمْ وَأَمْوَالَهُمْ بِأَنْ
لَهُمُ الْجَنَّةَ

己が命と財をアッラーに売り、そのしもべとなり、また御軍の兵士となることが、いかに利益ある商いであり、いかに尊き地位であるかを知りたければ、この譬えを聞け。

ある時、ひとりの王が、臣民のうち二人に、ひとりずつ一つの農園を預けた。その中には、工場も機械も馬も武器もすべて備わっていた。しかし時は嵐の戦乱のさなかであり、いかなるものも安定せず、やがて滅ぶか、かたちを変えて消えゆく定めにあった。

王は、その二人のために深き慈悲をもって、最も信頼する近侍を送り、きわめて慈悲に満ちた勅命を伝えた――

「汝らの手にあるわが委託物を我に売れ。そうすれば、我がそれを守り、無駄に失わせぬ。戦いが終わった後には、より美しく

して完全なかたちで返してやろう。しかも仮にその委託物が汝らの財産であるとしても、我はきわめて高価に買い取ってやる。さらにその工場や機械の道具を、我が名のもとに、我が工房で働かせよ。するとその代価も報酬も一から千へと倍増し、そのすべての利益を汝らに与えよう。加えて、汝らは無力にして貧しく、その大事業に必要な費用を整える力はない。すべての経費と物資は我が負担し、すべての収益と利益を汝らに授けよう。そして除隊の時まで、その委託物を手元に残しておくことを許そう。これぞ五重の利益のうちに利益である。」

「もし我に売らぬなら、すでに見てのとおりに、誰ひとりとして手にあるものを守り通せぬ。いずれすべてが汝の手から離れ、他の者と同じく失われるであろう。そのうえ、それは無駄に消え、高価な対価を得ることもできぬ。また、精妙にして貴重な器具や量具は、王の御事業に用いられぬなら、まったく価値を失う。さらにその管理と維持の苦労が汝の上にのしかかり、委託に背いた罪の報いを受けることになる。これぞ五重の損失のうちに損失である。」

「しかも我に売るということは、我に仕え、我が名のもとに行動することである。卑しい捕虜や放浪者である代わりに、偉大なる王の直属の自由なる侍従となるのだ。」

この恩寵と勅命を聞いたのち、二人のうちの思慮ある者は言った。「かしこまりました、喜んでお売りいたします。しかも千の感謝を捧げます。」

他方の男は傲慢で、魂はファラオのように我を張り、自己愛に溺れ、酒に酔い、まるでその農園に永遠に住むかのように振る舞い、この世の地震と動揺に無知であった。彼は言った。「いや、王など知るものか。私はこの財を売らぬ。私の気まますを乱すな。」

しばらくして、最初の男は人々が羨むほどの地位に昇り、王の恩寵に浴し、王宮において幸福に暮らした。だがもう一人は、誰もが憐れみながらも「自業自得だ」と言うほどの惨めな境遇に陥った。なぜなら、彼の過ちの報いとして、幸福と財産をともに失い、さらに罰と苦痛を受けるに至ったからである。

かくのごとく、欲に満ちた我が魂よ、この譬えの望遠鏡をもって真理の顔を見つめよ。あの王とは、永遠の初めより終わりなき御方、汝の主にして創造主である。そしてその農園、機械、道具、量りとは、汝の生命の領域の内にある所有物、すなわちその中の肉体と魂と心、さらにその内部にある目・舌・理性・想像力など、外的および内的の感覚のことにほかならぬ。あの尊き近侍とは、尊貴なる使徒であり、あの権威ある勅命とは、叡智に満ちたクルアーンである。かの御書は、この大いなる商いを次の御言葉にて告げている。

إِنَّ اللَّهَ اشْتَرَىٰ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ أَنْفُسَهُمْ وَأَمْوَالَهُمْ بِأَنَّ
لَهُمُ الْجَنَّةَ

あの波立つ戦場とは、この嵐のごとき現世の表面であり、休むことなく回転し、崩れ、変化し続けている。すべての人の心にこの思いを投げかける、「我らの手にあるものはすべて去り、滅びて失われる。ならば、それを永遠のものに変え、存続させる方法はないのか」と。そのとき天よりクルアーンの声が響く、「然り、ある。それも

五重の利益のうちに利益となる、麗しく安らかな方法がある」と。問われる、「それはいかに」。

答えて曰く—「委ねられたものを、真の所有者に売ることである。」

その取引には五つの利益が重なっている。

第一の利益—滅びゆく財が永遠のものとなる。なぜなら、永遠にして自存する御方に捧げられ、その道に費やされた儚き命は、永遠に転じ、永続の実を結ぶからである。そのとき命の一分一秒は、種や核のように外見では朽ちて消えるが、永遠の世界において幸福の花を咲かせ、穂を実らせる。そして中間の世界にて、光輝ある慰めの風景となる。

第二の利益—その対価は樂園という無比の報酬である。

第三の利益—身体の一肢、感覚の一つ一つの価値が一から千へと高まる。たとえば理性は一つの器である。もしそれをアッラーに売らず、己の欲のために使えば、過去の悲しみと未来の恐怖をこの哀れな頭に背負わせる呪われた道具となる。ゆえに罪人

は、多くの場合この理性の苦悩と悩みから逃れようとして、酒や娯楽に走るのである。だがもしそれを真の主に売り、その御名のもとに働かせるならば、理性は限りなき慈悲の宝庫と叡智の秘蔵庫を開く魔法の鍵となり、所有者を永遠の幸福へと備え導く主の案内者の地位にまで昇らせる。

また、目とは魂がこの世界を眺める窓である。もしそれをアッラーに売らず、己の欲に仕えさせるなら、移ろいゆく儂い美と光景を追い求め、欲望と快楽に仕える卑しき媒介者となる。だがもし視覚を全視の創造主に売り、その御名と御許しのもとに働かせるならば、目は偉大なる宇宙の書を読み解く読者となり、天地に展開する主の芸術の奇跡を観る証人となり、地上の慈悲の花園にて蜜を集める祝福された蜂のごとき地位に上る。さらに舌の味覚の力を叡智の創造主に売らず、己と腹のために働かせるならば、舌はただ胃の厩舎と工場の門番にすぎぬ卑しい存在に落ちる。だが、尊貴なる供給者にそれを売れば、味覚は神の慈悲の宝庫を監察する熟練の監督官となり、全

能にして自存の御方の厨房を感謝の心で視察する高貴な職責に昇るのである。

嗚呼、理性よ、耳を澄ませよ。災厄を招く器具は何処にあるか、宇宙を開く鍵は何処にあるか。眼よ、よく見よ。凡俗の力は何処に在るか。神の書庫の優雅なる観察者は何処に在るか。舌よ、よく味わえ。台所の門番にして工場の番人の如き身分は何処に在るか。慈悲の秘蔵を監理する監督は何処に在るか。かつ同様の諸器官と肢体を比べれば、まことに信仰者は樂園に相応しく、不信者は地獄に相応しき性質を帯びることを悟るであろう。彼らの各々がその如く価値を得る所以は明らかである。すなわち、信仰者は己が信仰により創造主の委託を、その御名と御許の範囲において用いるに対し、不信者は背信して己が命じるところの欲望のために用いるゆえである。

第四の利益一人は弱く、災厄多く、貧しく、必要甚だしきものなれば、もし全能にして尊厳なる方（創造主）に寄り頼み、信を置き委ねざれば、良心は恒に苦悩のうちにあり、徒らなる苦勞と悲嘆と後悔が彼を

圧する。やがて或は酔い、或は獣と化すであらう。

第五の利益—諸器官の礼拝と讃美と高き報酬は、汝が最も窮するときに、樂園の果実として与えらるべしと、至高の神秘の嗜好者、觀念の達人、深き專業者と見証のある者たちが一致して告げる。もし汝この五重の利益なる大いなる商いをなさずば、これらの恩恵を失うのみならず、五重の損害のうちに墮ちるであらう。

第一の損害—汝の最も愛する財、子、崇める己が欲、陶醉する若さと生は失われ、汝の手を離れ去る。だが汝の罪と悔いは汝に残り、汝の首に重くのしかかる。

第二の損害—委託に対する背信の責罰を受くる。すなわち最も尊き器具を、最も卑しき事に耗し己を虐げたためである。

第三の損害—すべての貴重なる人の器具を、動物以下の位に貶め、神の叡智に対して誣告と暴虐を働いたのである。

第四の損害—無力と貧困とともに、その大いなる生の荷を弱き背に負わせ、滅びと別離のむちの下に常に嘆き叫ぶであらう。

続けて第五の損害—汝はまた、諸器官の眞の価値と尊厳を取り去られ、享樂と墮落の奴隸として無益なる欲に使役されるがゆえに、永久の幸福を逃し、最終的には惨めなる果報を受くるであろう。さて、汝は選ぶがよい。導きと成功を最も慈悲深き方に祈願せよ。

第五の損害—永遠の生命の基盤と来世の幸福の備えを得るために与えられた理性・心・眼・舌といった慈悲の贈り物を、地獄の門を汝に開く醜惡な姿に変えてしまうことである。さて、今や「売る」とはどれほど重いことなのかを見よう。多くの人がそれを避けるほど困難なのか。否、断じてそうではない。決して重荷ではない。なぜなら、合法の範囲（ハラールの領域）は広く、享樂に十分であり、禁忌に踏み込む必要はまったくないからである。アッラーの定めた義務も軽く少ない。

そしてアッラーの僕にして兵となることは、言葉では尽くせぬほど甘美で、崇高なる名誉である。務めるとは、ただ兵士のようにアッラーの御名のもとで行い、御名をもって始め、アッラーの御為に与え、アッ

ラーの御為に受け取り、御法と御許しの範囲で行動して安らぐことである。もし過ちを犯したなら、悔い改めて赦しを請うべきである。「おお我が主よ、我らの過ちを赦し、我らを御身の僕として受け入れたまえ。御委託をお取りになるその時まで、我らを委託に忠実なる者としたまえ。アーミン。」一かく祈り、御方にひたすら懇願すべきである。



第七の言葉

آمَنْتُ بِاللَّهِ وَ بِالْيَوْمِ الْآخِرِ

人の魂にとって天地の奥義を解く難解なる二つの秘呪、すなわち「我アッラーを信ず」と「我来世を信ず」との言葉が、確かに如何にして幸福の門を開くか、また忍耐をもって創造主に依り頼み、帰依し、感謝をもって供給者に乞い祈ることが、如何に有益にして解毒剤の如き二つの薬であるか、さらにクルアーンに耳を傾けその命令に従い、礼拝を守り重大な罪を避けることが、永遠への旅路において如何に重要にして価値ある旅券、来世の備え、墓にての光となるかを知りたければ、次の譬え話を聴け。あるとき一人の兵が、戦場と試練のうち、損得の翻る凄まじき境地に陥った。左右より深き傷を受け、背後には一頭の大いなる獅子が襲いかからんと待ち受け、目の前には処刑台が立ち、愛する者どもがその樹に掛けられている光景が彼を待つ。しかも長き旅路が彼を待ち、強制的に遠ざけられつつある。

あわれなる者は絶望の内に思い煩うところ、その右脇にヒドルの如き善導者、光り輝く一人の人が現れ、「絶望するな、汝に二つの秘呪を与えて教えよう。正しく用いれば、その獅子は汝に従う良き馬となる。処刑台は慰みのゆりかごと化す。さらに二つの薬を与えよう。正しく用いれば、汝の開いた二つの強き傷は、ムハンマドの薔薇と呼ばるる芳しき花となるであろう。さらに一枚の切符を与えよう。それを以て、年に相当する道を一日にして越えん。信ぜぬならば少しく試みよ、かくすれば真理を悟るであろう」と。

実に彼は少し試みて、その確かさを認めた。かく語る者もまた「我、すなわちこの哀れなるサイドもこれを認める。少し試みて真に正しきを見た」と述べる。されば突然、左脇よりシャイターンの如き、酔いどれかつ欺く者が多数の飾り美女と華やかな外観、幻想、酔わせる物どもを伴いて現れ、彼の前に立ち、「おお友よ、来たれ、共に酒宴を楽しもう。あの麗しき乙女らの姿を見、あの愉快なる歌を聴き、甘美なる食を味わおう」と誘う。

問い―「ほう、それは口に秘して何を唱うるか」

答―「一つの秘呪なり」。

誘う者は言う、「やめよ、そのわけのわからぬことを。今の愉悦を乱すな」。

問い―「ほう、手に持つるものは何か」

答―「一つの薬なり」。

誘う者は言う、「捨てよ、それを。汝は丈夫なれど何か患ふか。今は喝采の時なり」。

問い―「ほう、その五つの札は何ぞ」

答―「一枚の切符なり、行き先の証なり」。

誘う者は言う、「破り捨てよ。それらは春の麗しき季節に旅するわれらに何の用か」と。かくて多くの策略を以て彼を説き伏せんとする。やがてその哀れなる者は幾許か心を傾け、惑わされるに至った。人は欺かれるものである。私もまたかの欺くものに惑わされたことあり、と語る。

そのとき、右のほうから雷のような声が響いてきた。

「だまされるな。そしてその欺く者にこう言え。『もしおまえが、背後の獅子を倒し、前にある絞首台を取り除き、右と左の傷を癒し、さらに背後に続く長い旅を止める力をもっているなら、やってみせよ。見せてみろ。できたら共に楽しもう。だが、できないなら黙れ、愚か者よ！』」—そのように言って、この天上からの導き手、まるでヒドルのような人物が語ったのである。ああ、若いころ笑いながら生き、いまはその笑いを悔いて涙する私の魂よ。

知るがいい。あの哀れな兵士とは、実はおまえ自身であり、人間そのもののなのだ。その「獅子」とは死であり、その「絞首台」とは、滅びと別れである。昼と夜が巡るたび、親しい者は別れ、すべてが過ぎ去っていく。右と左の「傷」とは、一つは果てしない人間の無力さ、もう一つは限りのない貧しさである。

そして、背後に続く「旅」とは、霊の世界から母の胎を経て、幼年、老年、この世、墓、中間界、復活、そしてスィラートの橋へと続く、長く果てしない試練の旅である。その旅を照らす二つの神秘の鍵—それが、

アッラーへの信仰と、来世への信仰なのだ。この二つの聖なる鍵によって、死は信仰ある人にとって、この世という牢獄から樂園の庭へ、慈悲あふれるアッラーの御前へと導く、従順な馬、ブルークのような乗り物となる。だからこそ、死の真実を悟った成熟した人々は、死を愛した。まだ死が訪れる前に、自ら死を体験したいとさえ願ったのだ。

また、滅びや別れ、死や永遠の別離、時の流れといった「絞首台」も、この信仰の鍵によって変わる。それは、絶えず新しく、色とりどりに、さまざまな姿で表れるアッラーの創造の奇跡、力の驚異、慈悲の顕れを、喜びをもって見つめ味わうための道となる。まるで、太陽の光を映す鏡が入れ替わりながら新しい色を映し出すように。あるいは、映画の幕が次々と変わってより美しい光景を見せるように—存在の移ろいもまた、そのようにしてさらに美しく、さらに意味深い眺めとなる。そして、二つの霊薬—それは「忍耐」と「信頼」である。造り主の力に頼り、その知恵に信を置くことだ。

そうではないか。「كُنْ فَيَكُونُ」—この命令を發する世界の王に、己の無力の証をもって身をゆだねる者が、何を恐れることがあるだろう。彼は最も恐ろしい災いの前でも、静かに心を安んじて言う。

「 اَنَا لِلَّهِ وَأَنَا إِلَيْهِ رَاجِعُونَ 」。

そして、慈悲深い主に心から信賴を寄せるのである。まことに、アッラーを知る人は、自らの無力とアッラーへの畏れのなかに甘美を見いだす。恐れのうちにも、実は深い喜びがある。もし一歳の子どもに理性があつて問うならば、こう答えるだろう—

「一番うれしいのは、自分の弱さを感じ、お母さんの叱る声を怖れながらも、その胸に抱かれて安心する瞬間です」と。けれども、すべての母の愛は、アッラーの慈悲のほんの一筋の光にすぎない。だから、成熟した人々は、無力のなかに、神への畏れのなかに、このうえない喜びを見いだした。彼らは自分の力を誇ることをやめ、ただアッラーに頼り、無力と畏れそのものを、自らのとりなしとして受け入れたのである。

もう一つの葉は、感謝と満足の心をもって求め、祈り、慈悲深き養い主の慈しみに

信を置くことである。そうではないか。そうだ、全大地を恵みの食卓とし、春という季節を花々の束としてその食卓のわきに置き、上に飾るように広げる、寛大で高貴なる御方の客である者にとって、貧しさや欠乏がどうして苦しく重いものとなろうか。むしろ、その貧しさや必要は、心地よい食欲のような形をとる。食欲が増すように、貧しさもむしろ増すことを喜ぶようになる。だからこそ、成熟した人々は「貧しさ」を誇りとしてきた。ただし、誤解してはならない。ここでいう「貧しさ」とは、アッラーに対して自らの無力を感じ、祈り求めることを意味する。人々にそれを見せびらかし、物乞いのように振る舞うことではない。そして、その「乗車券」や「証書」とは、何よりもまず礼拝をきちんと行い、重大な罪を避けることである。そうではないか。そうだ。あらゆる学者や体験者、そして霊的に味わいを得た人々の一致した見解によれば、あの長く暗い永遠の旅路において糧となり、光となり、乗り物となるものは、ただクルアーンの命令に従い、その禁止を避けることによってのみ得られる。科学も

哲学も、芸術も知恵も、その道では何の価値もない。彼らの光は、せいぜい墓の入り口までしか届かない。 ああ、怠け者の私の魂よ。五度の礼拝を行い、七つの大罪を避けることが、どれほど少なく、どれほど楽で、どれほど軽いことであろうか。その結果と実りと利益が、いかに偉大で重要であるかを、もし理性があり、それがまだ腐っていないなら理解できるはずだ。だから、罪と快樂へと誘うシャイターンや人にこう言うがよい。「もしおまえが死を殺し、滅びをこの世から取り去り、人間から無力と貧しさを取り除き、墓の扉を閉ざす手立てを持っているなら、言ってみよ、聞こう。そうでないなら黙れ。」 宇宙という大いなる礼拝堂の中で、クルアーンが宇宙を読み上げている。私たちはそれを聞こう。その光によって輝き、その導きによって行動し、それを口ずさむ常の言葉としよう。そうだ、語るべき言葉はそれであり、語られるべき言葉もそれである。真理であり、真理から来て、真理を語り、真理を示し、光のような叡智を広めるもの—それがクルアーンなのだ。

اللَّهُمَّ نَوِّرْ قُلُوبَنَا بِنُورِ الْإِيمَانِ وَ الْقُرْآنِ اللَّهُمَّ اغْنِنَا
 بِالْإِفْتِقَارِ إِلَيْكَ وَ لَا تَفْقِرْنَا بِالْإِسْتِغْنَاءِ عَنْكَ تَبَرَّأْنَا إِلَيْكَ
 مِنْ حَوْلِنَا وَ قُوَّتِنَا وَ التَّجَنُّأِ إِلَى حَوْلِكَ وَ قُوَّتِكَ
 فَاجْعَلْنَا مِنَ الْمُتَوَكِّلِينَ عَلَيْكَ وَ لَا تَكِلْنَا إِلَى أَنْفُسِنَا
 وَ احْفَظْنَا بِحِفْظِكَ وَ ارْحَمْنَا وَ ارْحَمِ الْمُؤْمِنِينَ وَ
 الْمُؤْمِنَاتِ وَ صَلِّ وَ سَلِّمْ عَلَى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ عَبْدِكَ وَ
 نَبِيِّكَ وَ صَفِيِّكَ وَ خَلِيلِكَ وَ جَمَالِ مُلْكِكَ وَ مَلِكِ
 صُنْعِكَ وَ عَيْنِ عَنَانَيْتِكَ وَ شَمْسِ هِدَايَتِكَ وَ لِسَانِ
 حُجَّتِكَ وَ مِثَالِ رَحْمَتِكَ وَ نُورِ خَلْقِكَ وَ شَرَفِ
 مَوْجُودَاتِكَ وَ سِرَاجِ وَحْدَتِكَ فِي كَثْرَةِ مَخْلُوقَاتِكَ وَ
 كَاشِفِ طُلُومِ كَائِنَاتِكَ وَ دَلَالِ سُلْطَنَةِ رَبُوبِيَّتِكَ وَ
 مَبْلَغِ مَرْضِيَّاتِكَ وَ مُعَرِّفِ كُنُوزِ أَسْمَائِكَ وَ مُعَلِّمِ
 عِبَادِكَ وَ تَرْجَمَانِ آيَاتِكَ وَ مَرَاتِ جَمَالِ رَبُوبِيَّتِكَ وَ
 مَدَارِ شُهُودِكَ وَ أَشْهَادِكَ وَ حَبِيبِكَ وَ رَسُولِكَ الَّذِي
 أَرْسَلْتَهُ رَحْمَةً لِّلْعَالَمِينَ وَ عَلَى آلِهِ وَ صَحْبِهِ أَجْمَعِينَ وَ
 عَلَى إِخْوَانِهِ مِنَ النَّبِيِّينَ وَ الْمُرْسَلِينَ وَ عَلَى مَلَائِكَتِكَ
 الْمُقَرَّبِينَ وَ عَلَى عِبَادِكَ الصَّالِحِينَ آمِينَ

第八の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
اللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ الْحَيُّ الْقَيُّومُ
إِنَّ الدِّينَ عِنْدَ اللَّهِ الْإِسْلَامُ

この世界、そしてその中の人間の魂—その魂のうちにおける「宗教」の本質と価値とは何か。もし真の宗教が存在しなければ、この世界は暗く狭い牢獄となり、宗教をもたぬ人間はもっとも不幸な存在となる。だが、この宇宙の謎を解き、人間の魂を闇から救い出すものこそ、

لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ および يَا اللَّهُ

である。—この意味を理解したければ、次のたとえ話を見て、よく聞くがよい。

昔、二人の兄弟があった。彼らはともに長い旅に出た。やがて道が二つに分かれたところにたどり着く。そこに一人の真面目そうな男が立っていた。兄弟は尋ねた。

「どちらの道が良い道でしょうか。」その男は答えた。「右の道には、法と秩序に従う義務がある。しかし、その負担のなかに

安心と幸福がある。左の道には、自由と放縦がある。しかし、その自由のなかに危険と不幸が潜んでいる。どちらを選ぶかはお前たちの選択だ。」

これを聞いて、善良な兄は「تَوَكَّلْتُ عَلَى اللَّهِ」[↑]と言って右の道に進み、秩序に従う道を選んだ。だが、不道德で放浪癖のある弟は、ただ「自由」であることを理由に左の道を選んだ。見かけは軽やかだが、内実は重く危険なその旅を続ける弟の姿を、私たちは心の目で追ってみよう。

その男は谷を越え、丘を越え、やがて荒涼たる砂漠へと足を踏み入れた。そのとき突然、恐ろしい唸り声を耳にする。振り返ると、鬱蒼とした森の陰から一頭の猛獅子が現れ、彼に向かって襲いかかってくるではないか。彼は必死に逃げ、逃げて逃げて、ついに深さ六十アールシン（およそ三十メートル）もある井戸に行き当たる。恐怖のあまり、身を投げ入れると、途中で両手が一本の木の枝に触れ、辛うじてつかまった。井戸の壁に根を張るその木には、二本の根があり、一方の根には白い鼠が、もう一方には黒い鼠がついて、それをかじっている。上を見上げると、あの獅子が井戸の口のそ

ばに立ち、まるで番人のように待ち構えていた。

彼は下をのぞきこんだ。すると、恐ろしい大蛇が井戸の底に潜んでいた。頭をもたげ、三十アールシン（約十五メートル）もの高さまでせり上がり、男の足元にまで近づいている。口は井戸の口のように大きく開き、まるで彼を呑み込もうとしているかのようにだった。井戸の壁には、噛みつく有害な虫がびっしりと這い回っている。さらに、つかまっている木の上を見ると、それは一本のイチジクの木であった。ところが不思議なことに、その木にはクルミからザクロに至るまで、さまざまな木々の果実が同時になっていた。しかしこの男は、愚かさで理解の欠如のために、この光景がありふれたものではないことを悟らなかった。偶然にできるはずのない、この奇妙で不思議な出来事の中に、何らかの深い秘密が隠されており、そこに偉大な働き手―創り主―の存在があることに気づこうとしなかったのである。心と魂と理性は、この痛ましい状況の中で、ひそかに悲鳴を上げていた。けれども、彼の支配的な自己（欲望の魂）

は、まるで何も起こっていないかのように振る舞い、魂と心の嘆きを聞かぬふりをして、むしろ自らを欺きながら、その木の果実をむさぼり食いはじめた。まるで楽園の庭の中にでもいるかのように。だが、その果実のいくつかは毒を含み、害をもたらすものであった。かつてアッラーが語られた聖なるハディースにこうある。

أَنَا عِنْدَ ظَنِّ عَبْدِي بِي

—「わたしは、わがしもべがわたしをどのように思うか、その思いのとおりになんと接する。」

この不幸な男は、悪い思い込みと愚かさのせいで、自分の見ているものを「当たり前」で「現実そのもの」だと信じた。だからその思い込みのとおりになんとも扱われ、そしていまもそのように扱われ、これからもそうであろう。死んで解放されることもなく、生きて安らぐこともなく、ただ苦痛のなかであえぎ続けている。われわれはこの不運な男をこの苦しみの中に残し、もう一人の兄弟—賢明な人のほう—の様子を見ることにしよう。

さて、この祝福された賢明な人は進んでいく。しかし兄のように苦しみを感じてはいない。というのも、彼は善良な性格ゆえに、良いことを考え、良い夢を見、孤独の中でも自分自身と親しく語り合えるからだ。また、彼は秩序を理解し、それに従っているため、無用の苦勞をせず、安らぎと安全の中で自由に歩むことができる。途中で彼も一つの庭に出会った。そこには美しい花々や果実があったが、手入れがされていないために汚れたものもあった。兄もかつて同じような庭に入ったが、汚れたものばかりに目をとめ、気分を悪くして安らぐこともなく去ってしまった。だがこの人は「すべてのものの良い面を見よ」という教えに従い、汚れたものには目もくれず、良いものからだけ恩恵を受けた。そして心地よく休みながら、再び歩みを進めていった。

やがて彼もまた、兄と同じように広大な荒野にたどり着いた。すると突然、獅子の咆哮が響きわたり、彼は恐怖を感じた。だがその恐れは兄のそれとは比べものにならないほど軽かった。なぜなら、彼は善い考えをもってこう思ったからである。「この

荒野にも必ず支配者がいる。そしてこの獅子は、その支配者の命に従う召使いであるかもしれない。」この思いが彼に慰めを与えた。とはいえ彼はなおも逃げ続け、ついに深さ六十アールシンの乾いた井戸に出会い、その中へ身を投げた。兄と同じように途中で一本の木の枝につかまり、宙吊りの状態になった。見ると、二匹の動物がその木の二本の根をかじっている。上を見れば獅子、下を見れば大蛇一兄とまったく同じ光景である。しかし彼の恐れは兄の千分の一にも満たなかった。なぜなら、彼の善い性格が善い思考を生み、その思考がすべての物事の良い側面を彼に見せていたからである。

そこで彼はこう考えた。「この不思議な出来事のすべては、互いに関係している。まるで一つの命令によって動いているようだ。そうであるならば、この中には何かの秘密があるにちがいない。おそらくこれらは、目に見えない支配者の命令によって動かされているのだ。ならば、私はひとりではない。その隠れた支配者は私を見ている。

私を試し、ある目的のために、ある場所へと導こうとしているのだ。」

この「甘美な恐れ」と「善き思考」から、彼の心の一つの探求心が生まれた。「私を試し、自らを知らせ、この不思議な道を通してある目的へ導こうとしているその方は、いったい誰なのだろうか？」

やがて、知りたいという探求心から、その「謎」の持ち主に対する愛情が芽生えた。そしてその愛から、謎を解き明かしたいという願いが生まれ、その願いから、その「謎の主」を喜ばせ、気に入られるような美しい態度をとりたいという意志が生まれた。彼はふと、つかまっている木の上を見た。それはイチジクの木であったが、枝の上には何千という種類の木々の果実が実っていた。そのとき、彼の心から恐れがすっかり消えた。なぜなら、確信したからである—このイチジクの木は「目録」であり、「索引」であり、「展示場」なのだと。すなわち、あの見えざる支配者は、自らの庭園の果実の見本を、この木に不思議な力としるしによって集め、客人たちのために用意したご馳走を示す印として、その木を美

しく飾ったのだと。そうでなければ、一本の木が何千もの木の果実を実らせるはずがない。それを悟った彼は、ひたすら祈りをささげはじめた。やがてその祈りの中で、心に「謎を解く鍵」がひらめいた。彼は声を上げて叫んだ。「おお、この地の支配者よ！私はあなたのもとに落ちました。あなたに身を寄せます。あなたのしもべとなり、あなたの喜びを求め、あなたを探し求めます！」その祈りを口にした瞬間、井戸の壁が裂け、そこに壮麗で清らかで美しい庭園への扉が開いた。いや、むしろ大蛇の口がその扉へと変わったのである。そして獅子と大蛇は、二人の従者の姿に変わり、彼を中へと招き入れた。さらには、あの獅子は彼に従う馬の姿へと変じた。

—ああ、怠け者のわが魂よ。そして空想の友よ。さあ、この二人の兄弟の歩みを比べてみよう。善がどのように善をもたらし、悪がどのように悪を呼ぶのか、見て確かめようではないか。

見なさい。左の道を選んだ不幸な旅人は、つねに大蛇の口に吞まれるのを待つようなもので、恐怖に震えている。一方、幸福な

旅人は、実りと光に満ちた美しい庭園へと招かれる。不幸な者の心は絶えず恐れと不安に引き裂かれているが、幸福な者は甘やかな畏れと喜びの中で、不思議な出来事を観想し、そこに深い教えを味わう。不幸な者は孤独と絶望のうちに苦しみ、幸福な者は親しみと希望と憧れの中で喜びを感じる。不幸な者は自分を、野獣に襲われる囚人のように思う。幸福な者は、高貴な客人として、慈悲深きもてなし主の奇跡的なしもべたちと親しく語り合い、楽しんでいる。不幸な者は、見かけは甘くても内実は毒の果実を食べることで、自ら苦しみを早めている。なぜなら、あの果実はすべて見本にすぎないからだ。味わうことは許されている――本物を求めるための試みとして。しかし、獣のように貪り食うことは許されていない。幸福な者は、少し味わって意味を悟り、食べるのを後に延ばし、待つことそのものを楽しむ。不幸な者は、自らに不正を働いた者である。昼のように明るく美しい真理を、その目の曇りによって闇に変え、自分のために地獄の幻をつくり出した。そのような

者は、もはや誰の憐れみを受けるにも値せず、誰をも恨む権利はない。

たとえばこういうことだ。ある人が、美しい庭園の中で、親しい友人たちに囲まれ、夏の盛りに楽しい宴を楽しんでいるのに、その幸福に満足できず、汚れた酒で自らを酔わせてしまい、やがて自分が冬の真ただ中で、野獣たちの中に飢えと裸で置かれていると妄想し、叫び、泣き始めたとしたら—その人は哀れむに値しない。自分自身を害し、友人たちを怪物のように見て侮辱しているにすぎない。この不幸な人とは、まさに前の兄弟のような者である。一方、幸福な兄弟は現実の真理を見ている。そして、真理は本来、美しいものである。真理の美を悟る者は、真理の主の完全さを尊び、その慈しみを受けるにふさわしくなる。ここに「悪は自らに由来し、善はアッラーに由来する」というクルアーンの教えの奥義が明らかになる。これらの二人をさらに比べればわかるだろう。前者の「支配的な自己」は、彼に靈的な地獄を準備していた。一方、後者の「善き意志」「善き思い」「善き性質」「善き考え」は、彼を大いな

る恩恵と幸福、そして輝かしい徳と霊的な恵みへと導いた。

ああ、わが魂よ。そしてこの物語を共に聞く者よ。もし不幸な兄弟のようになりたいくなければ、幸いな兄弟のようになりたいと思うなら、クルアーンに耳を傾け、その命に従い、その導きにしっかりとすがり、その法に基づいて生きるのだ。

この寓話に込められた真理をもし理解したなら、宗教の本質、世界の意味、人間の実相、そして信仰の価値をそこに当てはめて考えることができるだろう。そのうちの重要な点を私が述べよう。細かい意味は自ら悟るがよい。

見てみよ。あの二人の兄弟とは、一方が「信仰する魂」と「清らかな心」、もう一方が「不信の魂」と「腐れた心」である。そして右の道は、クルアーンと信仰の道であり、左の道は、反逆と不信仰の道である。その道の途中にある「庭園」とは、人間社会と人間文明の中の一時的な共同生活のことである。そこには善と悪、美と醜、清浄と汚濁がともに存在する。賢い者は—

خُذْ مَا صَفَا دَعْ مَا كَدَّرْ

一という教えに従い、心の平安を保って歩むのである。

広大な「荒野」はこの地上、すなわちこの世界を意味する。「獅子」は死と寿命の終わり、「井戸」は人の肉体と人生の時間、「深さ六十アールシン」はおよそ六十年という平均的な人生の長さを示している。

「木」は寿命と生命の根であり、「白と黒の二匹の動物」は昼と夜を意味する。「大蛇」はその口が墓に通じる「中間世界」と「来世への通路」である。しかし信仰者にとってその口は、この世の牢獄から楽園の庭へ通じる扉に変わる。

また、壁に群がる「害虫」はこの世の災難である。だが信仰者にとってそれは、怠りや忘却の眠りを破る神の優しい警告、慈悲のまなざしとなる。木に実る果実は、この世の恩恵にほかならない。寛大なるアッラーは、それらを来世の恩恵の「見本」とし、思い出させる「しるし」とし、楽園の果実を買い求める「客」を招くための見せ物としてお造りになった。

さらに、一本の木がさまざまな種類の果実を同時に実らせるという事実は、アッラーの永遠の力の印、神の養育のしるし、そして主権の印章を示している。

なぜなら、「一つのものからあらゆるものを生み出す」—すなわち一つの土からすべての植物や果実を生み、一つの水からあらゆる生き物を創り出し、単純な食べ物から動物の複雑な器官をつくり上げる—という創造の業。そしてその逆に、「あらゆるものを一つにする」—たとえば、生き物がきわめて多様な食物をとりながら、それを自分固有の肉や肌に変える—といった精妙な働き。これらすべての芸術的な創造は、「唯一にして永遠なる神」である永遠の王の固有の印章であり、模倣し得ぬしるしである。実に、「一つをすべてに、すべてを一つに」なしうることは、万物の創造主にのみ属する力であり、全能の神に特有の徴である。それはひとつの「印」であり、神の存在の証そのものである。

そして、この「謎」とは、信仰の秘密によってのみ開かれる創造の英知の奥義である。その鍵こそ—

يَا ٱللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا ٱللَّهُ ٱللَّهُ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ ٱلْحَيُّ ٱلْقَيُّومُ

一である。

大蛇の口が楽園の門へと変わったという寓意は、次の真理を示している。すなわち、墓は不信と反逆の人々にとっては、孤独と忘却に満ちた暗く狭い牢獄であり、まるで大蛇の腹のような恐怖の穴である。だが、クルアーンと信仰を持つ人にとっては、この世という牢獄から永遠の楽園の庭へ、試練の場から慈悲の園へ、苦しみの生から慈悲あふれる主への帰還へとつながる扉である。

また、獅子が優しい従者に変わり、従順な馬となったという寓意は、死の真の意味を示している。死は、不信の人々にとってはすべての愛するものからの永遠の別離であり、この世という偽りの楽園からの追放であり、孤独と恐怖のうちに墓という牢獄へ閉じ込められることである。だが、導きを受け、クルアーンの光に生きる人にとっては、先に他界した友人や愛する者たちに再び会うための旅のきっかけであり、真の祖国・永遠の幸福の地へ入るための手段で

ある。それはこの世の牢獄から楽園の園へと招かれる呼びかけであり、慈悲深き主の恩寵により、そのしもべとしての務めに対する報酬を受け取る「番（交替）」でもある。そしてまた、人生という労苦の任務からの「除隊」であり、礼拝と試練という訓練の授業を終えた後の「休息」でもある。

要するに一

有限の人生を最終目的として生きる者は、たとえ外見上は楽園のような暮らしをしていようとも、内面的には地獄にいる。そして、永遠の命に真剣に向かう者は、二つの世界（この世と来世）の幸福にあずかる。たとえこの世がどれほど苦しく困難であっても、彼はこの世を「楽園への待合室」として見なすゆえに、それを甘んじて受け入れ、忍耐のうちに感謝するのである。

اَللّٰهُمَّ اجْعَلْنَا مِنْ اَهْلِ السَّعَادَةِ وَالسَّلَامَةِ وَالْقُرْآنِ وَ

اَلْاِيْمَانِ اٰمِيْنُ

اَللّٰهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلٰى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ وَعَلٰى آلِهِ وَ
صَحْبِهِ بِعَدَدِ جَمِيعِ الْحُرُوفَاتِ الْمُتَشَكِّلَةِ فِي جَمِيعِ

الْكَلِمَاتِ الْمُتَمَثِّلَةِ بِأَذْنِ الرَّحْمَنِ فِي مَرَايَا تَمْوجَاتِ
 الْهَوَاءِ عِنْدَ قِرَاءَةِ كُلِّ كَلِمَةٍ مِنَ الْقُرْآنِ مِنْ كُلِّ قَارِءٍ مِنْ
 أَوَّلِ النُّزُولِ إِلَى آخِرِ الزَّمَانِ وَارْحَمْنَا وَالدِّينَا وَارْحَمِ
 الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ بَعْدَ دَهَائِ بِرَحْمَتِكَ يَا أَرْحَمَ الرَّاحِمِينَ
 آمِينَ وَالْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ



第九の言葉

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
فَسُبْحَانَ اللَّهِ حِينَ تُمْسُونَ وَحِينَ تُصْبِحُونَ * وَلَهُ
الْحَمْدُ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَعَشِيًّا وَحِينَ
تُظْهِرُونَ

兄弟よ、あなたは私に、なぜ礼拝（サラート）が一日の特定の五つの時刻に定められているのか、その智慧を問うている。その理由は数多くあるが、ここではそのうちの一つにだけ触れよう。

それぞれの礼拝の時刻は、偉大な「転換」の瞬間であると同時に、壮大なる神の働きが顕れる鏡であり、その働きのうちに注がれる普遍的な恩恵の反映でもある。ゆえに、全能にして威厳ある神への賛美と崇敬を、これらの時において特に強く捧げることが命じられたのである。また、二つの時刻のあいだに注がれた無数の恩恵の総和に対して、感謝と讃美をもって報いる—それが礼拝という行為に他ならない。

この繊細で深遠な意味を少しでも理解するためには、「五つの省察」を、私自身と共にじっくりと聞く必要がある。

第一の省察

礼拝の本質とは、アッラーを讃え、崇め、感謝することである。

つまり、アッラーの威光と莊嚴さの前で、言葉と行いによって「スブハーナッラー (سُبْحَانَ اللَّهِ)」と唱え、神をあらゆる欠陥から清めること。

また、アッラーの完全さの前で、「アッラーフ・アクバル (اللَّهُ أَكْبَرُ)」と口と身で唱え、偉大さをたたえること。

さらに、アッラーの美と慈しみの前で、心と言葉と身体で「アルハムドゥ・リッラー (الْحَمْدُ لِلَّهِ)」と唱え、感謝をささげること。

要するに、「スブハーナッラー（讃美）」「アッラーフ・アクバル（崇敬）」「アルハムドゥ・リッラー（感謝）」の三つの言葉が、礼拝の核、つまり種のような中心的要素である。そのため、礼拝のあらゆる動作と祈念の中に、この三つが繰り返し現れ

る。またそのために、礼拝が終わったあとも、その意味を強め確かめるために、これらの神聖な言葉がそれぞれ三十三回ずつ唱えられる。こうして礼拝の本質は、この要約された聖なる言葉によって強調され、心に刻まれるのである。

第二の省察

礼拝の本質とはこうである。神の御前に立つしもべが、自らの欠点と無力さ、貧しさを認め、主の完全なる支配と、永遠に満ちた力、無限の慈悲の前で、驚きと愛情をもってひれ伏すことである。すなわち、主権と養育の偉大な王権が、従順と服従を求めるように、その聖なる純粹さもまた、しもべに自己の欠陥を悟らせ、罪を悔いて赦しを乞わせ、そして主をあらゆる欠点から清らかにし、迷妄の徒が抱く虚偽の思想から超然とし、被造世界のあらゆる欠陥からも高く聖なる存在であることを、「スブハーナッラー (سُبْحَانَ اللَّهِ)」の言葉で宣言することを求めているのである。

また、主の完全な力の偉大さは、しもべに自らの弱さ、そして被造物すべての無力

さを悟らせ、その無限の力の偉大なしるしの前で感嘆と驚嘆をもって「アッラーフ・アクバル（اللهُ أَكْبَرُ）」と唱え、謙虚にひざまずき、そこに安らぎと信頼を見いだすことを求めている。

さらに、主の果てしない慈悲の宝庫は、しもべが自らの必要と、あらゆる被造物の欠乏を祈りと願いの言葉であらわし、主の恵みと恩寵を感謝と賛美、「アルハムドゥ・リッラー（الْحَمْدُ لِلَّهِ）」の言葉で告白することを求めている。

したがって、礼拝における一つひとつの動作と祈りの言葉は、これらの意味を内に含み、それらを体現するために神によって定められたものである。

第三の省察

人間がこの大宇宙の「小さな写し」であるように、開端章が全クルアーンの「光り輝く縮図」であるように、礼拝もまた、すべての礼拝行為の種類を含む「光の目録」であり、全ての被造物がそれぞれの仕方で行っている多様な礼拝の形を指し示す「神聖な地図」なのである。

第四のヌクテ（省察）

たとえば、一週間を計る時計があったとして、その中の秒針・分針・時針・曜日を示す針が互いに関係し、互いに似た動きをし、互いに意味を映し合っているとしよう。同じように、偉大なる創造主の「大いなる時計」であるこの世界においても、昼と夜の交替がその「秒針」にあたり、それを数える年の巡りが「分針」に、そして人間の一生を構成する各時期が「時針」に、さらに人類史や宇宙の時代が「曜日」に相当している。これらは互いに対応し、互いに似た意味を映し出し、互いを思い起こさせる。

たとえば

夜明けの時刻は、日の出までの間であり、春の初めを思わせる。人間の誕生前一母胎に宿る瞬間を想起させ、また天地創造の六日間の最初の日にも似ている。これらはいずれも、神の創造のはじまりを告げる出来事を思い出させる。

正午の時刻は、夏の盛り、青年期の充実した時期、そして人類の歴史における「人間創造の時代」に似ている。その時刻は、

神の慈悲の現れと、恵みの満ちあふれる流れを思い起こさせる。

午後の時刻は、秋の季節に似ており、人間の老年期、そして「最後の預言者（アッラーの祝福と平安あれ）」の時代―すなわち「幸福の時代」を想起させる。それはまた、神の働きの変化と、慈悲の恵みを思い出させる。

日没の時刻は、秋の終わりに無数の被造物が姿を消していくように、人の死、さらには世界の終末の始まりを連想させる。これによって、人は神の威厳と権能の表れを感じ取り、眠りに似た不注意から目覚め、心を呼び戻される。

夜の初めの時刻は、闇が昼の世界のすべての痕跡を黒い衣で包み隠すように、冬が地上の命を白い雪の衣で覆い隠すように、そして人が死してその記憶さえ忘却の幕の下に沈むように、この試練の場である世界の幕が閉じられることを思い出させる。そのとき、人は「全能にして征服する主」の威厳ある働きを感じ取るのである。

夜はまた、冬を思わせ、墓を思わせ、中間世界を思わせる。そのすべてを通じて、

人の魂が「慈悲深き主」の憐れみにいかに依存しているかを悟らせる。夜の礼拝は、墓の夜とバルザフの闇の中でどれほど必要な「光」であるかを思い出させ、心と呼び覚ます。そして、このすべての変化の中で、真の恵み主の無限の恩恵を思い起こし、いかにアッラーが讃美と感謝にふさわしいお方であるかを告げ知らせる。

そして、再び訪れる「朝（第二の朝）」は、復活の日の夜明けを思い出させる。実際、この夜が必ず朝を迎えるように、この冬が必ず春を迎えるように、復活の朝もまた必ず訪れる。墓の後の春（バルザフの後の再生）もまた、同じほどに確かなことである。

したがって、この五つの時刻はそれぞれ、重大な変化の始まりに位置しており、またそれぞれが偉大な変化を思い起こさせる。日ごとに現れる神の力の働き―昼と夜の交替に映る神の手の動き―は、年ごと、時代ごと、永遠の流れの中での神の奇跡と慈悲の贈り物を思い出させる。

ゆえに、被造物としての本質的な使命、真の礼拝の根本義務、そして人間の確かな

負債である「定められた五度の礼拝」は、まさにこれらの時にこそふさわしく、最も意味深いものである。

第五の省察

人間という存在は、生まれつき極めて弱い。にもかかわらず、すべての出来事が彼に影響し、彼を悲しませ、苦しませる。

また、人間はきわめて無力である。にもかかわらず、彼の周囲には無数の災いと敵がある。

さらに、人間はきわめて貧しい。にもかかわらず、その必要と欲求は限りがない。

そして人間は怠惰で力も乏しい。にもかかわらず、人生の課題と責務は重く困難である。

しかも、人間という存在は、知性によって宇宙全体と関わりを持つように創られている。にもかかわらず、彼の愛するもの、親しむものが次々と滅び、別れ去っていくことに、常に心を痛める。

さらに理性は、彼に高貴な目的と永遠の価値を示すが、彼の手は短く、寿命は短く、力は短く、忍耐もまた短い。

このような状態にある魂が、夜明けのときに「全能にして威厳ある神」、そして「慈悲に満ちた美の主」の御前に、祈りと礼拝をもって近づき、心の願いを差し出し、助けと導きを求めること―それがどれほど必然であり、どれほど必要な拠りどころであるかは明らかである。なぜなら、その後続く一日の世界では、彼の上に無数の出来事と重い責務がのしかかるからである。朝の礼拝は、それらに耐えるための心の「支点」となるのだ。

そして正午の時刻―それは、一日の盛りであり、太陽が頂点に達して少しずつ傾きはじめるときであり、日々の仕事が最も忙しく、心が疲れ、重圧に押される時でもある。また、儚く去りゆくこの世の重労働の中で、人の心が無意味さと倦怠に沈み、呼吸を求めるひとときでもある。さらにこの時刻は、神の恵みと恩寵が最も顕著に現れる瞬間でもある。

このとき人の魂は、重圧と忘却の霧を抜け出し、儚く虚しいものから離れ、永遠に存在し、すべてを支える真の恵み主の御前に立つ。両手を胸に組み、あらゆる恩恵の

総和に感謝と讃美を捧げ、助けを求め、威厳と偉大さの前で自らの無力を告白し、比類なき永遠の完全さと美に対して、ひれ伏して感嘆と愛を表す—これが正午の礼拝である。これほど美しく、喜ばしく、必要で、ふさわしい行為を理解できない者は、人間とは言えない。

そして午後の時刻—それは、秋の寂しい季節を思わせ、老年の悲しみを映し、また世界の終末の痛ましい時代を思い起こさせる。同時に、それはその日の仕事が終わりに近づき、健康と平安、善き働きなど、神の恵みの実りが大きな総和となって表れる時間である。また、太陽が沈みかける様子は、人間がこの世において一時の客であり、すべてが移ろいゆくものであることを示している。

この時刻に、永遠を求め、永遠のために創られ、恩恵に感動し、別れに傷つく人間の魂が、身を清めて礼拝に立ち、「永遠に存在し、すべてを保つ主」の御前で祈りを捧げる—そこにどれほど深い意味があることか。

彼は、消えることのない慈悲にすぎり、
数え切れぬ恩恵に感謝と讃美を捧げ、主の
威厳の前に身をかがめ、永遠の神性の前に
自らを消し去るようにひれ伏す。そのとき、
真の心の慰めと魂の安らぎが訪れ、彼は
「神の莊嚴なる臨在の前に仕える者」とし
て立つ。—この「午後の礼拝」こそ、いか
に崇高な務めであり、いかにふさわしい奉
仕であり、人間という被造物の根源的な義
務を果たすものであり、さらに言えば、深
い幸福そのものであるか——それは真に人
である者なら理解できるであろう。

マグリブ（夕方）の時刻

この時刻—それは、冬の始まりを思わせ
る。夏や秋に咲き誇った繊細で美しい被造
物たちが、寂しげな別れの季節に沈み、姿
を消していくそのときである。人の死をも
思い出させる。愛する者たちすべてと痛ま
しい別れを告げ、墓の中へ入っていく瞬間
である。さらには、この世界が激しい震え
のうちに息絶え、住む者たちがそれぞれ別
の世界へ移り、この試練の館の灯が消える
とき—その光景をも想起させる。そして、

移ろいゆく儚い愛の対象に心を奪われてきた者たちを、強く目覚めさせる時刻である。

このような時に——永遠の美の主を求めように創られた人間の魂は、これらの巨大な出来事を動かし、世界という大きな書をめぐらせる永遠の王、変わることなき主の玉座へと心を向ける。そして「アッラーフ・アクバル (الله أَكْبَرُ)」と唱えて、この儚いものたちから手を離し、両手を胸の前で組み、永遠の御方の御前に立つ。

「アルハムドゥ・リッラー (الْحَمْدُ لِلَّهِ)」——
一欠けることのない完全さ、比類なき美、
限りなき慈悲に対して感謝と讃美を捧げ、
「إِيَّاكَ نَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ」——「あなたにのみ
仕え、あなたにのみ助けを求めます」と
告白し、

無援にして無比なる主権者、独りの神に、
服従と信頼の誓いを新たにす。

そして、その果てしない威厳と無限の力、
誰にも侵されぬ栄光の前にひざまずき、あ
らゆる被造物とともに自らの弱さと貧しさを
表しながら、

「スブハーナ・ラッビヤル・アズィーム
(سُبْحَانَ رَبِّيَ الْعَظِيمِ)」——「偉大なる主よ、
あなたを称えます」と唱える。

さらに、移ろわぬ御本質の美、変化しない聖なる属性、永遠に完全なる存在に対して、地にひれ伏しながら、すべての有限なものを超えて主への愛と礼拝を告げ、全ての働きものの代わりに永遠の美と慈悲をもつ主を見いだし、

「スブハーナ・ラッビヤル・アアラー
(سُبْحَانَ رَبِّيَ الْأَعْلَى)」——「いと高き主よ、
あなたを讃えます」と唱えて、欠陥なき主を賛美する。

そして、礼拝の最後に座して「タシャッ
フド（信仰の証言）」を唱え、全被造物が
主に捧げる祝福と祈り、清らかな賛美を自
らの名において永遠の美と威厳の主に献げ、
使徒ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）へ
平和の挨拶を送り、主の命に従う誓いを新
たにし、信仰を光で新しくする。

こうして、この宇宙の壮大な秩序を観想
し、壮麗なる創造主の唯一性を証言する。
そして、「主の支配の代弁者」「神の喜び

を伝える者」「宇宙という書の聖句を人々に伝える者」であるムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の使徒性を証しする。—これが「マグリブの礼拝（夕の祈り）」である。

この礼拝がいかに清らかで優雅な務めであり、どれほど尊く、甘美で、美しく、真実に満ち、儚いこの宿り木の世界において永遠の交わりと変わらぬ幸福をもたらすものであるか—それを理解できない者は、もはや人間とは言えない。

イシャー（夜）の時刻

この時刻—それは、昼の名残が完全に消え、夜が世界を覆うときである。

昼と夜を入れ替える御方、

مُقَلِّبُ اللَّيْلِ وَالنَّهَارِ

—全能にして威厳ある主は、白い昼のページを黒い夜のページへとめくる。その行為は、夏の緑豊かなページを、冬の白く冷たいページへと変える御方、

مُسَخِّرُ الشَّمْسِ وَالْقَمَرِ

—英知に満ちた御方の神的な働きを思い出させる。

また、時の流れのうちに、墓に眠る者たちの痕跡さえも地上から消え、すべてが別の世界へ移るさまを想起させる。それは「命と死を創造した御方」の神聖なる働きを示している。さらに、狭く儂く卑しいこの世が完全に崩壊し、大いなる痙攣のうちに息絶え、広大で永遠にして威厳ある来世の世界が開かれる——そのときに顕れる「天地の創造主」の威厳と美の顕現をも思い起こさせる時刻である。

この世界の真の所有者、運行者、崇拜される唯一の愛すべき主とは、昼と夜を、冬と夏を、この世とあの世を、一冊の書のページをめくるように易々と書き換え、閉じ、開き、すべてに命じる「全能の主」である。そのことを明らかに示す時刻が、このイシャーの時である。

このとき、果てしない無力さと弱さ、貧しさと欠乏のうちにあり、無限の未来の闇へ向かい、終わりになき出来事の波に揉まれる人間の魂は、この夜の祈りの中で、アブラハムのように叫ぶ。

لَا أُحِبُّ الْآفِلِينَ

そのように言って、沈むことなき神にして、永遠の愛すべき御方の御前に、礼拝をもって身を寄せる。

そして、この儚い世界、儚い生の中で、暗い現実と暗い未来を越え、永遠に存在する御方に向かって祈りを捧げる。ほんのしばしの祈りであっても、それは永遠なる交わりの断片であり、数分の祈りのあいだに「不滅の命」を味わうことができる。そのひとときの中で、人は自らの世界に光を注ぎ、未来を照らし、愛するものたちの別れと滅びによって受けた傷に、慈悲深き主の慈愛と導きの光という癒やしの薬を塗るのである。

また、人はこの世をしばし忘れ、この世のほうもまた彼を忘れる。彼は心の涙をもって、慈悲の御座の前で悩みを吐き出す。そして、何が起こるかも分からぬ、死に似た眠りに入る前に、最後の礼拝の務めを果たし、一日の行いの帳を美しい結末で閉じるために立ち上がる。すなわち、滅びゆく愛する者たちすべての代わりに「永遠に愛すべき主」を見いだし、頼ることのできぬ無力な者たちの代わりに「全能にして気高

い主」を持ち、恐るべき災いの数々から守るために「慈しみ深き護り主」の御前に立つ。

そして「ファーティハ章（開端章）」を唱える——つまり、欠けたもの、無力な被造物たちを褒め讃える代わりに、完全にして豊かで、慈悲に満ちた「万物の主」を讃え、感謝するのである。

やがて祈りは、崇高な呼びかけへと至る。

إِيَّاكَ نَعْبُدُ

この言葉に到ることで、人は己の小ささ、無であること、孤独を抱えつつも、「永遠の王・審判の日の主」への帰属を通して、この大宇宙の中で尊ばれた客、意味ある使命を持つ存在としての地位に昇る。

そして続けて、

إِيَّاكَ نَعْبُدُ وَإِيَّاكَ نَسْتَعِينُ

一と唱えることで、あらゆる被造物を代表し、全宇宙の大いなる礼拝と祈願の声を、神の御前にささげる。

さらに、

اهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ

—と祈りながら、暗く不確かな未来の中で、永遠の幸福へと通じる光の道—「正しい道」への導きを求めるのである。

さらに思いなさい—

今まさに休みに入った草木や動物たち、そして姿を隠した太陽、眠りについた諸々のもの。だが夜空に輝く目覚めた星々は、まるで軍の兵士のように主の命に従い、この「世界という客の館」で、一つひとつがその御方の灯であり奉仕者である。

その壮麗なる御方の威厳を思いめぐらし、「アッラフ・アクバル」と唱えてひざまずく—それがこの時の祈りである。

また、全被造物が大いなる礼拝に入るさまを思う。すなわち、今この夜に眠る生き物たちのように、毎年、そしてあらゆる時代に存在するすべてのもの—地球さえ、世界そのものさえ—が、一つの整然たる軍、あるいは従順な兵士のように、自らのこの世での奉仕を終えるとき、神の命

كُنْ فَيَكُونُ（「有れ、と言え、有る」）

によって退役し、見えぬ世界へ送られる。そのとき、彼らは滅びの場、日の入りの敷

物の上で、「アッラーフ・アクバル」と唱えて、秩序正しくひれ伏している—まさにそれが消滅の真の姿なのだ。

そして再び、同じ御命令

كُنْ فَيَكُونُ（「有れ、と言え、有る」）

による復活の声が響き、春の訪れとともに彼らは再び現れる。あるものはそのままの形で、あるものは似た姿でよみがえり、立ち上がり、主の御前に仕えるための帯を締める。

このように、万物が再び目覚め、蘇りの奉仕を始めるように—

この小さな人間もまた、それらに倣って、完全にして美の主、慈悲に満ちた御方の御前に立つ。驚きに満ちた愛、滅びを超えた謙虚さ、威厳に満ちたへりくだりのうちに、「アッラーフ・アクバル」と唱えて地に伏す。

この礼拝こそは、一種の「昇天」であり、創造の奥義に近づく旅そのものである。

イシャー（夜の礼拝）を行うこと——それはなんと美しく、なんと甘美で、なんと

優雅で、なんと高貴で、なんと気高く、なんと理にかなった奉仕であり、礼拝であり、そして真実そのものの行いであることか——あなたは今やそれを理解したのであろう。

このように、五つの礼拝の時刻のそれぞれが、偉大な変化を示し、神の壮大な行為の徴であり、すべてを包む恩恵の印である。したがって、義務として課された五度の礼拝がこれらの時刻に定められていることは、完全なる知恵の表れなのである。

سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
الْحَكِيمُ

اَللّٰهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلٰى مَنْ اَرْسَلْتَهُ مُعَلِّمًا لِّعِبَادِكَ
لِيَعْلَمَهُمْ كَيْفِيَّةَ مَعْرِفَتِكَ وَ الْعِبَادِيَّةَ لَكَ وَ مَعْرِفَةَ
لِكُنُوزِ اَسْمَائِكَ وَ تَرْجُمَانًا لِّآيَاتِ كِتَابِ كَائِنَاتِكَ
وَ مَرَاتًا بِعِبَادِيَّتِهِ لِحَمَالِ رَبُّوبِيَّتِكَ وَ عَلٰى آلِهِ وَ
صَحْبِهِ اَجْمَعِينَ وَ اَرْحَمِنَا وَ اَرْحِمِ الْمُؤْمِنِينَ وَ
الْمُؤْمِنَاتِ آمِينَ بِرَحْمَتِكَ يَا اَرْحَمَ الرَّاحِمِينَ



第二十一の言葉

(二つのマカームから成る)

第一マカーム

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
إِنَّ الصَّلَاةَ كَانَتْ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ كِتَابًا مَوْقُوتًا

「礼拝（サラート）は、信仰者たちにとって定められた時刻の義務である。」

あるとき、年齢も体格も地位も高い一人の男が私にこう言った。

「礼拝はよいことだ。しかし、毎日毎日、五度も繰り返すのは多すぎる。終わりがないうようで、飽きてしまう。」

その言葉を聞いてからしばらくのち、私は自分の魂に耳を傾けた。すると、まったく同じ言葉をつぶやいているのを聞いた。そしてよく見れば、怠惰という耳を通して、シャイターン（悪魔）から同じ教訓を受けているではないか。

そのとき私は悟った—あの男は、あの言葉をすべての「命令する魂」の代表として語ったのだ、あるいは語らせられたのだと。

そこで私はこう言った。

「私の魂は命令する悪しき魂である。自分の魂を正せない者が、どうして他人を正せよう。ならば、まず自分から始めよう。」

そして私は自分の魂に語った。

第一の警告

おお、わが不幸な魂よ。お前の寿命は永遠なのか？ 明日、あるいは来年まで生きる確かな保証があるのか？

お前をうんざりさせているのは、「この世が永遠に続く」という錯覚である。

享樂のために、まるで永遠にこの世に居座るつもりで気ままに振る舞っているのだ。

だがもしお前が理解していたなら—お前の命は短く、そのうえ多くの時が無駄に過ぎ去っていることを。

そうすれば、お前はきっと悟るはずだ。二十四時間のうちのわずか一部を、永遠の命の幸福へと通じる真実の奉仕にささげる

ことが、どれほど美しく、喜びに満ち、安らかで、慈しみに満たされた行いであるかを。

それを煩わしく思うどころか、むしろ真剣な熱意と静かな歓びを呼び起こすべきなのだ。

第二の警告

おお、腹を満たすことばかり考える魂よ。お前は毎日、パンを食べ、水を飲み、空気を吸っている。それらに飽きたことがあるか？

飽きないだろう。なぜなら、それらは必要が繰り返されるからだ。繰り返されることによって、うんざりするどころか、むしろ快さを感じている。

そうであるならば一私の身体という家の中で、お前の仲間である「心」の糧、「魂」の生命の水、「神的な本性」が呼吸する空気を引き寄せるもの—それが礼拝なのだ。したがって、お前は礼拝を退屈に思ってはならない。

実に、限りない悲しみと痛みにさらされ、また限りない喜びと望みに引き寄せられ、

愛に満ちた「心」の力は、すべてを為すことのできる慈悲深く寛大な主の門を、祈りによって叩くことによってこそ得られる。

また、この儚い世界にあって、絶えず別離の叫びを上げて去っていく無数の存在と関わりをもつ「魂」の生命の水は—
すべてに代えて永遠の神、永遠の愛する御方の慈悲の泉へ、礼拝を通して心に向けることによってのみ飲むことができる。

さらに、生まれつき永遠を求め、永遠のために創られ、永遠の御方の鏡であり、限りなく繊細で精妙な神的意識をもつ人間の「霊的な本性」は、この堅く、押しつぶされるような、息の詰まる現実世界において、深い呼吸を切に必要としている。

そして、その呼吸を可能にする唯一の窓—それが礼拝の窓である。

第三の警告

おお、私の忍耐のない魂よ。過ぎ去った日の礼拝や試練の苦しみを、いま思い出して悩むのは、理にかなっているだろうか？
あるいは、まだ来てもいない未来の日々の礼拝や困難を、今から想像して不安になり、

倦怠を感じるのは、果たして理性的な行いだろうか？

この忍耐のなさは、次のような愚かな司令官に似ている。彼の右翼の軍には、敵の右軍が合流し、味方は新たな援軍を得たというのに、彼は誤って大切な兵力を右へ送り、中央を弱めてしまう。また、左翼には敵がまだ到着していないのに、彼はそこにも大軍を送り、「撃て！」と命じる。結果として中央の防御は崩れ、敵はその隙を突いて中央を突破し、全軍を潰走させる—お前はまさにこれに似ている。

なぜなら、過ぎ去った日の苦労はすでに「慈悲」に変わり、その痛みは消え、その喜びだけが残っている。労苦は「榮譽」に昇り、試練は「報酬」に変わっている。したがって、過去のことを思って倦むのではなく、むしろ新たな熱意と清らかな喜び、そして継続への真剣な努力を得るべきである。

一方で、未来の日々はまだ来ていない。それをいまから思い煩い、怠惰になるのは一まるで明日の飢えや渴きを今日感じて泣き叫ぶような愚かさである。

この真実を理解したなら、理性ある者ならば、礼拝については「今日」だけを考えよ。

「この一時間を、報いのきわめて大きい、負担のきわめて軽い、美しく高貴な奉仕に捧げている」と心に言い聞かせよ。そうすれば、苦い倦怠は甘い努力へと変わる。

おお、私の忍耐のない魂よ。お前は三つの忍耐を担わねばならぬ。
一つは――従順の上での忍耐。
一つは――罪に対する忍耐。
そしてもう一つは――災難に対する忍耐。

もし理性があるなら、この第三の警告で語られた例えを導きとして歩め。勇敢に「ヤー・サブール (يَا صَبُور) おお忍耐深き御方よ)」と唱え、この三つの忍耐を肩に担え。そして、神が授けた忍耐の力を誤った方向に散らさなければ、その力はあらゆる苦労と災難に十分に耐えうる。その力をもって、すべての重荷に立ち向かうのだ。

第四の警告

おお、愚かな私の魂よ。

この「礼拝という奉仕の務め」は、果たして無意味なのか？ 報いが乏しいのか？ だからお前は退屈だと言うのか？

しかし考えてみよ。ある人がほんの少しの金をくれるか、あるいはお前を脅かすだけで、お前は一日中、疲れを知らずに働くだろう。

では、この世という客の宿で、無力で貧しいお前の心に糧と富を与え、やがて必ず行くことになる墓という住まいで光と糧を備え、必然的に立たねばならぬ審判の日の法廷で証と赦しを授け、必ず渡らねばならぬシラートの橋を渡るときに光となり、乗り物となる礼拝—それが無益で、報いの少ないものだということのか？

ある人が、お前に百リラの贈り物を約束したとしよう。その約束を信じて、お前は百日間、働き続けるだろう。だがその人は約束を破る可能性がある。それでもお前は疑わずに働く。

では、約束を破ることが不可能な御方が、天国という報酬と永遠の幸福という贈り物をお前に約束し、わずかな時間、実に美しい奉仕の仕事にお前を雇われたとしたら—お前はそれを怠け、気のりせず、嫌々ながら、いい加減な態度で務め、その御方の約束を疑い、その贈り物を軽んじるとしたら、どれほどの懲らしめと恐ろしい罰を受けることになるか、考えたことがあるか？

この世の牢獄に入れられる恐怖だけで、人は最も重い仕事にも必死に従うのに、永遠の地獄という監獄の恐れが、なぜ最も軽く優しい奉仕のために、お前に少しの努力も与えないのか？

第五の警告

おお、現世を愛してやまない私の魂よ。

お前の礼拝への怠り、祈りの欠如は、現世の忙しさが多いためなのか？ それとも生計を立てるための苦勞で時間がないからなのか？

だが考えてみよ。お前はただ現世のためだけに創られたというのか？ だからすべての時間をそれに費やすのか？

お前は能力の点ではすべての動物の上に置かれているが、この世の糧を得る力の点では、一羽のスズメにも及ばないことを知っているだろう。

ならば理解すべきではないか—お前の本来の務めは、動物のようにただ働き回ることではなく、真の人間として、永遠の命のために努力することなのだ。

しかも、お前が「世の仕事」と呼ぶものの多くは、実はお前に関係のないことばかりであり、無用な詮索で手を出し、巻き込まれているだけではないか。

最も大切なことを後回しにして、まるで何千年も生きるかのように、どうでもよい知識に時間を費やしている。

たとえば—土星の輪はどういう構造をしているか、アメリカのニワトリは何羽いるか—そんな価値のないことに、尊い時間を浪費している。まるで天文学や統計学から高い教養を得ているかのような錯覚に陥って。

もしお前が言うならば、「私を礼拝から遠ざけ、怠らせるのはそんな無駄ごとで

はなく、生計のために避けられない仕事なのだ」と。ならば私はこう言おう。

もし一日百クルシュの賃金で働いていて、誰かが来てこう言ったとする。

「ここをほんの十分快ほど掘ってみなさい。百リラの価値のある宝石——ダイヤやエメラルドを見つけられる。」

それを聞いてお前が、「いや、行かない。十クルシュ分の賃金が減ってしまう。食いつ持が減るから」と答えたら、どれほど愚かな言い訳か分かるだろう。

まさにそれと同じだ。お前はいま、自分の畑で生計のために働いている。

もし義務の礼拝を怠れば、そのすべての労働の実りは、この世のつかの間の、取るに足らない、祝福のない糧にすぎなくなる。だが、もし休憩や息抜きの時間を、魂の安らぎと心の呼吸のための礼拝に用いるなら、そのとき、お前は現世の糧の恵みとともに、来世の糧、永遠の旅の備えとなる、二つの貴重な宝の源泉を得ることになる。

第一の鉾脈

お前の畑に育っている草木一花をつけるものも、実を結ぶものも一は、すべてそれぞれの仕方であッラーを讃えている。もしお前が善い意図をもってそれを受けとめるなら、その讃美の一部にお前も加わることができる。

(注：この章は、ある園で一人の人に語られた教えを、このような比喩の形で表したものである。)

第二の鉾脈

また、その畑から取れた産物を一人でも動物でも、牛でも虫でも、買う者でも盗む者でも一誰かが食べる時、それはお前にとって「施し」として記される。

ただしそのためには、お前がその財を眞の養い主であるアッラーの名において、その御許しの範囲で扱い、アッラーの所有物をアッラーの被造物に分け与える配分係のような存在として自分を見なければならない。

そう考えれば、礼拝を怠る者がどれほど大きな損をし、どれほど貴い富を失っているかが分かるだろう。

働きに熱意を与え、行いに強い精神的な力を生み出すこの二つの結果—すなわち二つの鉋脈—から遠ざかる者は、結局は破産してしまうのだ。

やがて年を取れば、畑仕事にも嫌気がさし、「どうせ自分はもう世を去るのだから、こんな苦勞をして何になる」と言って怠けてしまう。

だが信仰をもつ人はこう言う。「もっと礼拝を重ね、正しい労働を続けよう。墓の中にさらに多くの光を送り、来世のための糧を増やそう」と。

要するに

お前の魂よ、知れ。昨日という日はすでにお前の手を離れた。明日という日はお前の手に入る証がどこにもない。

ゆえに本当にお前のものと呼べるのは「今日」だけである。

せめて一日のうち一時間でも、未来への備えとして、永遠の貯蔵庫となる礼拝の場—モスクや敷物の上—に投じよ。

また知れ。新しい一日が始まるとは、お前にとっても他のすべての人にとっても、

新しい世界の扉が開かれるということである。もし礼拝をしなければ、その日の世界は暗く乱れたまま過ぎ去り、来世ではお前に不利な証言をすることになる。

なぜなら、すべての人はそれぞれ一日の中に自分だけの世界を持っており、その世界の姿はその人の心と行いに従うからである。鏡に壮麗な宮殿が映っても、その鏡が黒ければ黒く、赤ければ赤く映る。そして鏡が歪んでいれば、美しい宮殿も歪んで見える。

同じように、お前は自分の心と知性と行いと感情によって、自分の世界の姿を変えるのだ。その世界をお前の味方にもできれば、敵にもしてしまう。

もしお前が礼拝をし、その礼拝を通してこの世界の創造主に向かうなら、その瞬間、お前の世界は光で満たされる。まるで礼拝が一つの灯火となり、礼拝への意志がその灯りのスイッチを押すようにして、暗闇を照らす。そして世の混乱や変化のただなかにも、そこに知恵ある秩序と、神の力による意味深い書きものがあることを見せてくれる。

そのとき、聖句の光が心に差し込む。

اللَّهُ نُورُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

この御言葉の光によって、お前のその日の世界は照らされ、明るく光りながら、お前のために証言を立てるのである。

決してこう言うてはならない―「おれの礼拝などどこにある、この“礼拝の真の意味”などおれとは関係ない」と。

なぜなら、一つのナツメの種の中にも、ナツメの木そのものの性質がすべて含まれているからだ。違いがあるのは、ただ要約と展開の差だけである。

同じように、お前やおれのような信者の礼拝にも一たとえ自覚がなくとも一偉大な聖者の礼拝と同じ光の一部が宿っている。その真理の秘密の一端が、確かにそこにある。

たとえお前の意識がそれを感じ取らなくとも、確かにその光は存在している。

ただし、その光の開き方と輝き方は、信仰の段階によって異なる。

ナツメの種から、完全に成長したナツメの木に至るまでに無数の段階があるように、

礼拝にもまた、さらに多くの段階がある。

だが、どの段階にあっても、その礼拝の中には必ず、この光に満ちた真理の本質が宿っているのだ。

اَللّٰهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلٰى مَنْ قَالَ الصَّلَاةُ عِمَادُ الدِّينِ
وَعَلٰى آلِهِ وَصَحْبِهِ اَجْمَعِينَ



結び

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ

おお、現世に溺れ、この命を甘美なものと思い込み、来世を忘れて世の快樂を追う愚かな魂よ。お前はいったい何に似ているか知っているか？ 駝鳥のようなものだ。

駝鳥は狩人を見ても飛ぶことができず、頭を砂の中に突っ込む。狩人が自分を見ないようにと。しかし、その大きな体は外に出ていて、狩人には丸見えだ。ただ自分だけが目を砂に埋め、何も見ないふりをしている。

おお、魂よ。このたとえをよく見て理解しろ。世に目を奪われ、永遠を忘れることが、どんなに尊い喜びを痛ましい苦しみに変えるかを示している。

たとえばこの村—すなわちバルラーに二人の人がいるとしよう。

一人は、親しい友の九十九人がすでにイスタンブルに行き、楽しく暮らしている。

残っているのは彼一人で、いずれ自分も行く予定だ。だから彼はイスタンブルを恋い慕い、いつもそこを思い浮かべている。もし誰かが「さあ、そろそろお前も行く番だ」と言えば、彼は喜んで笑顔で向かう。

もう一人は、友の九十九人がこの村を去り、ある者は滅び、ある者はもう見えない世界に沈み、再び会うこともできないと思い込んでいる。その哀れな者は、すべてを失った寂しさを紛らわせるために、今そばにいたった一人の客人にすがり、慰めを求めようとする。

おお、魂よ。最も愛されし者—預言者ムハンマドをはじめ、すべての友は墓の向こう側にいる。ここに残っているわずかな者も、やがてそちらへ行く。だから、死を恐れて背を向けるな。男らしく墓を見つめ、その声を聞け。堂々と死の顔に笑いかけ、そこに何が求められているのかを見極めろ。決して気を抜いて、二番目の男のような愚か者になるな。

おお、魂よ。こう言うてはならない—
「時代は変わった。世の中は別物になった。」

みんな現世に没頭し、生活の悩みに酔いしれている」と。

なぜなら、死は変わらない。別れは依然として別れであり、永遠の命に変わることはない。

人間の無力さと貧しさも変わらず、むしろ増している。

人の旅は止まらず、むしろ速度を増して進んでいる。

また言うな―「おれもみんなと同じだ」と。なぜなら、「みんな」はせいぜい墓の入口までしかお前に付き合わない。「皆と一緒になら安心だ」という慰めも、墓の向こうでは何の意味も持たない。

さらに、自分を放任された存在だなどと思うな。

この世界という旅人の宿を、よく観察してみるがいい。何ひとつとして秩序も目的もなく存在するものはない。

では、どうしてお前だけが、秩序も目的もなく放っておかれることがありえようか。

地震のような出来事一天地の揺らぎを見よ。

それらは偶然の遊びではない。たとえば、大地の上に、草木や動物たちの種々の衣を着せるように、見事な模様を施し、層を重ねて調和を保つ。どの層も目的と知恵に満ち、見事な秩序で回転している。

その一方で、地球が人間—とくに信仰ある者—の怠惰と不信仰の重みに耐えかねて身を震わせるように、地震が起こるのだ。

(注：この部分はイズミルの地震の折に書かれたものである。)

それなのに、無神論者はそのような出来事を目的のない偶然と見なし、多くの被災者の苦しみや損失を、無意味なものとして虚空に投げ捨て、彼らを絶望に沈める。

それは大きな誤りであり、同時に大きな不正でもある。

実際には、そのような出来事は、慈悲深く英知あるアッラーが命じ、信仰者の儚い財産を永続する施しの形に変え、感謝を忘れた罪を贖うためのものである。

やがて来る日には、この従順な地上が、人間の手による不信仰と忘恩の汚れた跡を醜いものとして見なし、創造主の命によって大地は大きく震え、すべてを一掃し、清めるだろう。

そのときアッラーは、不信仰の民を地獄へと投げ入れ、感謝を捧げる者たちにこう告げられる。

「さあ、天国へ入れ」と。



يَا أَيُّهَا النَّاسُ اعْبُدُوا رَبَّكُمُ الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالَّذِينَ
 مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ * الَّذِي جَعَلَ لَكُمْ
 الْأَرْضَ فَرَاشًا وَالسَّمَاءَ بِنَاءً وَأَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً
 فَأَخْرَجَ بِهِ مِنَ الثَّمَرَاتِ رِزْقًا لَكُمْ فَلَا تَجْعَلُوا
 لِلَّهِ أَنْدَادًا وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ

すなわち

「おお、人々よ。お前たちを、そして
 お前たちより以前の者たちを創造した主に
 仕えよ。そうすれば、お前たちは敬虔の境
 地に達するであろう。

お前たちの主こそは、大地をお前たち
 のための寢床とし、天をお前たちの上の屋
 根となし、天から水を降らせて、その水に
 よって地より果実やあらゆる糧を生じさせ
 た方である。

ゆえに、アッラーに並ぶ者を設けては
 ならない。お前たちはよく知っているでは
 ないかアッラー以外に、お前たちの創造主
 も、崇拝すべき神も存在しないことを。」

序論

信仰と信条の諸命題を強固で揺るぎないものとし、それを魂の習慣として確立させるのは、ただ礼拝によってである。

実際、アッラーの命令を実行し、その禁じることを避けるという行為、すなわち礼拝を通じて、良心と理性によって理解された信仰の諸真理が育まれ、強められなければ、その働きと影響は弱くなる。このことを証明するのが、現今のイスラーム世界の状態である。

また、礼拝は来世の幸福だけでなく、この世の幸福にもつながるものであり、生活と来世—すなわち現世の営みと永遠の行く末—を調和させる要因である。

それはまた、個人としても人類としても完成へと導く道であり、創造主と被造者のあいだを結ぶ、きわめて高貴で尊い絆でもある。

礼拝がこの世の幸福に結びつく理由

第一には、人間はあらゆる動物のなかで特別に選び出された存在であり、繊細で不思議な性質をもって創られている。そのた

めに、人間の心の内にはさまざまな欲求や傾向が生まれた。たとえば、人は最も上質なものを求め、美しいものを好み、飾られたものに惹かれ、人間らしい尊厳と豊かさのある生活を望む。

これらの欲求を満たし、食べ物や衣服、その他の必要を望みどおりに整えるためには、多くの技術と技能が必要となる。だが人はそれらすべてに精通しているわけではない。したがって、人は他者と協力し、互いに労働の成果を交換し合うことによって助け合い、自分たちの必要を満たしていくのである。

しかしながら、人の内には欲望の力、怒りの力、理性の力があり、これらが創造主によって制限されていない。なぜなら、人間が自由意志によって成長と完成を得るために、これらの力はある程度放たれているからである。ゆえに、人間社会の取引や関わりの中では、しばしば不正や侵害が起こる。こうした不正を防ぐために、人々の労働の成果を交換する際には、公正が必要となる。

だが、一人ひとりの理性は公正を完全に理解しきれない。したがって、人間には「全体的な理性」が必要となる。個々の理性がそこから学び、導きを得ることができるような普遍的な理性である。この「全体的な理性」は法の形で現れる。そして、その法こそが啓示の法（シャリーア）である。

さらに、このシャリーアを実際に効力あるものとし、社会の中で実行し適用するためには、その法を執行し、代表する権威ある存在が必要となる。

その存在こそが預言者である。

預言者は、外面的にも内面的にも人々の上に指導的地位を保つために、物質的・精神的な高貴さと特別な資格を備えていなければならない。また、創造主との関わりの深さと絆を示すための証拠を持つ必要がある。その証拠こそが奇跡である。

次に、アッラーの命令と禁令に人々が従う心を育てるためには、創造主の偉大さを人の心の中に確立することが必要である。その確立は信仰の教義—すなわち信仰の真理が明らかになること—によって成される。

そして、この信仰の教えを強め、発展させるためには、繰り返し新たに実践される礼拝が不可欠である。礼拝こそ、信仰を養い、確信を深め、魂の奥に根づかせる行いなのだ。

第二に、礼拝とは、人の思考を英知ある創造主へと向けさせるためのものである。

しもべが創造主へ心向けると、自然にその従順と服従が生まれる。

従順と服従は、しもべを完全な秩序の中に入れ、彼をその調和のもとに置く。

人がこの秩序のもとに入り、法則に従うことによって、真の「英知」の秘密が現れる。

この英知は、宇宙という大書のあらゆる頁に輝く、精妙な創造の文様として現れ、世界の調和を映し出す。

第三に、人間は一種の「中心」であり、創造全体の秩序、自然の法、そして宇宙に広がる神の掟の光線が集まる場所である。ゆえに人は、その法則に結びつき、つながりを保ち、その掟の裾にしっかりと取りすがらなければならない。そうしてこそ、宇

宙に流れる全体の調和の流れに参加できる。もしそれに背き、世界の層々で回転する大いなる歯車の動きに逆らうならば、その歯車の下で押し潰されることになる。これを防ぐ唯一の道が、アッラーの命令と禁令—すなわち礼拝の実践—である。

第四に、命令を守り、禁じられたことを避けることによって、個人は社会の中で多くの関係を持つようになり、さまざまな段階で他者と結びつくようになる。

特に宗教的な法や公共の利益に関わる領域では、一人の人間がまるで一つの「種族」のような存在となる。なぜなら、多くの権利、名誉、導き、教育、改革などの責務が、その人の行いに託されるからである。

もし、その命令を実行し禁令を避けるような人がいなければ、それらの務めはすべて踏みにじられてしまうだろう。

第五に、イスラームに生きる者は、礼拝を通じて、すべてのムスリムとの間に確かなつながりを得る。その結果、強固な絆と結びつきが生まれる。この絆は揺るぎない兄弟愛を育み、真の愛情をもたらす。そも

そも社会の完成と発展の第一歩は、この兄弟愛と愛情にほかならない。

礼拝が人の自己完成をもたらす理由の説明：

人間は肉体的には小さく、弱く、無力であり、外見だけを見れば動物の一種にすぎない。

しかしその内にはきわめて高貴な魂を宿し、非常に大きな可能性を持ち、数えきれぬほどの傾向と欲求を抱き、果てしない望みを胸に秘め、限りない思考の力を備えている。

さらに、抑えがたい欲望や怒りのような力をも内に抱き、その存在の構造はきわめて驚くべきものである。

まるで、あらゆる種類の被造物や世界のすべてを縮図として映し取ったような、宇宙全体の索引のような存在である。

このように壮大な本性をもつ人間において、魂を広げ、その潜在力を花開かせるのは礼拝である。

人の資質を成長させ、あらゆる傾向を正しく区別し清めるのも礼拝である。

また、果てしない望みを実現へと導き、思考を広げ、秩序のもとに整えるのも礼拝である。

欲望や怒りの力を適切な限度に収め、外なる身体と内なる感覚を曇らせる自然の汚れを洗い流すのも礼拝である。

人をその定められた完成の高みに到らせるのも礼拝である。

しもべと創造主とのあいだにある最も高貴で繊細な関係—それもまた礼拝によってのみ実現する。

まことに、人間のあらゆる完成の中でも最も崇高なものは、この関係と結びつきにほかならない。

注意

礼拝の核心は「誠心」にある。この誠意とは、礼拝をただアッラーが命じられたからこそ行うということを意味する。もし他の目的や利益が礼拝の「動機」として掲げられるならば、その礼拝は無効である。目的や利益は、ただ「促す理由」にはなり得ても、「根本の理由」とはなり得ない。

（『奇蹟の徴』より）